神津島の地名と字名の話し

はじめに

地名とか字名などその固有の名詞は、どうゆう事があって名付けられたものであろうか、人間が集団で生活する限り、地名・字名の発生は必然的のものである。
またその地名は、その土地を示すに最もふさわしい意味を持ったもの違いない。
それは、地形的なもの、歴史的なもの、伝承伝説によるもの、それが古代のことであれば、古語で語られているかもしれない。
また、その呼び方については、当然のことながら島の言葉で語られていた筈である。
近世になり土地が資産として私有化される事になり、その管理上公簿に記載される時島呼びの地名が、共通語の漢字で表記されたために元の意味から遠いものになって行ってはいないだろうか。
自然的なもの、社会観の変革によっても、地名・字名は変化しているということもまた事実であろう。
特に最近では、地積調査による地名・字名の統合編入による変化がある、そして今後も変わっていくかも知れないのである。

もくじ

字・地名の部

一、神津島村の部・・・・・・・・・・一頁
二、穴の山の部・・・・・・・・・・二五〃
三、榎木ヶ沢の部・・・・・・・・・二八〃
四、大沢の部・・・・・・・・・・・三一〃
五、大沼の部・・・・・・・・・・・三四〃
六、お観音の部・・・・・・・・・・三八〃
七、鍛冶山の部・・・・・・・・・・四一〃
八、鴎穴の部・・・・・・・・・・・四六〃
九、金長の部・・・・・・・・・・・五〇〃
一〇、黒島の部・・・・・・・・・・五二〃
一一、神戸山の部・・・・・・・・・五三〃
一二、砂糠山の部・・・・・・・・・五四〃
一三、錆崎の部・・・・・・・・・・五五〃
一四、沢尻の部・・・・・・・・・・五六〃
一五、惣四郎の部・・・・・・・・・五九〃
一六、多幸の部・・・・・・・・・・五九〃
一七、高嶺の部・・・・・・・・・・六一頁
一八、滝川の部・・・・・・・・・・六三〃
一九、高処山の部・・・・・・・・・六五〃
二〇、秩父山の部・・・・・・・・・六六〃
二一、鉄砲場の部・・・・・・・・・六九〃
二二、長根山の部・・・・・・・・・七〇〃
二三、長浜の部・・・・・・・・・・七二〃
二四、名組山の部・・・・・・・・・七四〃
二五、那智の部・・・・・・・・・・七七〃
二六、葱の場の部・・・・・・・・・八一〃
二七、走る間の部・・・・・・・・・八三〃
二八、洞沢の部・・・・・・・・・・八六〃
二九、宮塚山の部・・・・・・・・・八八〃
三〇、三浦の部・・・・・・・・・・九〇〃
三一、向山の部・・・・・・・・・・九一〃
三二、面房の部・・・・・・・・・・九三〃

三三、山川の部・・・・・・・九六頁
三四、焼山の部・・・・・・・九八〃
三五、天上山の部・・・・・・・一〇〇頁

磯の部

一、赤根の部・・・・・・・一〇三頁
二、名組の部・・・・・・・一〇六〃
三、大立の部・・・・・・・一〇七〃
四、浦根の部・・・・・・・一〇九〃
五、長浜の部・・・・・・・一一〇〃
六、めいしの部・・・・・・・一一二〃
七、鯖崎の部・・・・・・・一一五〃
八、沢尻の部・・・・・・・一一七〃
九、かたふたの部・・・・・・・一一八〃
一〇、あきどめの部・・・・・・・一二二〃
一一、のまの部・・・・・・・一二八〃
一二、せんちちろの部・・・・・・・一三五〃
一三、金長鼻の部・・・・・・・一三八〃
一四、狼ヶ崎の部・・・・・・・一四〇〃
一五、三浦の部・・・・・・・一四二頁
一六、長崎の部・・・・・・・一四四〃
一七、この口の部・・・・・・・一四五〃
一八、松山の部・・・・・・・一四八〃
一九、多幸湾の部・・・・・・・一五〇〃
二〇、砂糠崎の部・・・・・・・一五二〃
二一、長根湾の部・・・・・・・一五三〃
二二、観音浦の部・・・・・・・一五七〃
二三、作根の部・・・・・・・一五八〃
二四、走る間の部・・・・・・・一五九〃
二五、返す浜の部・・・・・・・一六〇〃
二六、恩馳島の部・・・・・・・一六二〃
二七、祗苗島の部・・・・・・・一六五〃
追記の部・・・・・・一六七頁
附録の部・・・・・・巻末

長い間親しんだ旧い字・地名がやがて消えて行くかもしれない。
それをできるだけ記録して置くことにしたのが「神津島の地名・字名考」で、決して学問的なものではないことをお断わりしておく。

○印は旧字名を示す。

神津島村の部

秋葉様（アキラサマ）
○上の山（ウエンヤマ）
○桶川（オケガア）
○川原（カアラ）
○鍛冶屋沢（カジヤンサア）の一部
上の川原（カメンカア）
郷村（ゴウムラ）
金毘羅山（コンピ）
○山行（サンギョウ）
下の沢（シタンサア）
庄助平（ショウスケダイロ）
○せんき（センキ）の一部
愛宕山（アタゴサマ）
○池の山（イケンヤマ）の一部
○大の沢（オオノサア）
○風早（カザハイ）
上里（カミザト）
公儀山（コウギヤマ）
○御殿山（ゴテンヤマ）
○砂原（サアラ）の一部
下道（シタビチ）
七軒町（シチケンマチ）
○須賀原（スカッパラ）
大六殿（ダイロクデン）

日那山見（ダンナヤマミ）
○ついじ（ツイジ）
○鉄砲場（テッポウバ）の一部
寺山（テラヤマ）
長沢（ナガサア）
はばた（ハバタ）
文助山見（ブンスケヤマミ）
○平たん沢（セイタンジャア）の一部
○宝崎（ホウサケ）
○洞沢（ボラッチャア）の一部
○前浜（マエハマ）
○宮原の上の山（ミヤッパラノウエンヤマ）
森浜（モウリ）
○矢割（ヤアリ）
○与種（ヨタネ）
船上場（フネアゲバ）
○菊若（キクワカ）
川原端（カアラッパタ）

○滝川（タケガア）の一部
出川（デガア）
寺町（テラマチ）
土管川（ドカンガア）
八三郎沢（ハッチャブロジャア）
ばばあ道（ババアミチ）
○蛇沢（セエビジャア）
○深井道（フカイドウ）の一部
○防風（ボウフ）
坊主山見（ボウズヤマミ）
○宮原（ミヤッパラ）の一部
○明神山（ノウジンヤマ）
○元屋敷（モトヤシキ）
○横川（ヨコッカア）
汚らん沢（ヨゴランサア）
○川尻（カアシリ）の一部
○けたっ沢（ケタッチャア）の一部
○浜山（ハマヤマ）の一部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
秋葉様	アキラサマ	高処山の山裾の上の山の一部で、その中腹に秋葉山神社が祀られているので、その神社の名が地名化したものなのか。
愛宕様	アタゴサマ	同じく高処山の山裾の、矢割の一部と思われる尾根に愛宕神社の祠があるので、神社名のアタゴサマがそのまま地名になったものと思われる。また、他の説によれば島以外の地からの転化かとしている。
上の山	ウエンヤマ	ウヘであれば「上」であるが、ここはウエと思われる、ウエは「末」の意があり高処山の末の山というように思われる。

池の山	イケンヤマ
桶川	オケガア

他の説でも位置関係から生じたとしている。

他の説によれば、池が多くあった為としているが、土砂で埋め立てられた所とか、自然の水溜りなどを、「イケ」と言うので湿地の山やまたは、自然に埋め立てられた湿地と言うことになるのか。
島では平地の山林も山と呼ぶ。

ここは与種の下辺、平たん沢の下流部に当たる所である、オケは「アケ」で「アク」の転と考えれば「湿地」の意になる、カアは川でなく「水溜り」とか、または「池」とも取れる。
明治四十年七月与種山の鉄砲水で、死者十六人・負傷者四十二人・全壊家屋参拾一戸・半壊家屋十三戸の災害と翌四十一年の水害で、この付近の地形は大きく変化している。
地名は桶で汲み取れるほどの池か、水溜りのある所と言うことなのか。

大の沢	オオノサワ
河原	カーラ
風早	カザハイ
鍛治屋沢	カジヤンサア

オウのウは、「山の縁辺の回った所」またノは「傾斜地」を表わすので、山の縁で傾斜している沢と言うことであろうか。

文字のとおりカハラは「河沿いの地」ということか、かっては上の川原（カメンカアラ）と下の川原に区分されていたと考えられ、天上山からの土砂が神津沢を流下してきて川原を作ったものであろう。他の説でも文字どうり河原から名付けられた地名としている。

風の早い地と言うのが一般的である、またハヤは「崖地」の意もあるとしている。他の説でも風が勢いよく吹き付ける地であるからとしている。

カジはカチの転と考えれば「崖の下」の意がある、

ヤは「岩」の略とすればカジヤは、「崖の下の岩のある沢」という意になる。

天明二年（西暦一七八二年）の「神津島御見分御尋の趣申上候書付」によれば、当時鍛冶職人が一人居たことを記しているので、他の説では火気を使う職業なので火災を恐れて、この地で渡世させたものかとしている。

カミは上で「上手の」ということであろうか、サトは古代の行政区画で、民家五〇戸で「里」を作ったとされるので、上手の里ということであろうか、他の説でも上の方の里としている。

河原の項参照、

他の説では、亀の棲む川があったのでとしている。

コウギはコギでコグ「抜く」が語源で「崖崩れ」の意がある、現在の寺山を含めた部落西側の森は、前浜のママ（崖地）に続いているので、その崩壊と防風の

上里	カミザト
上の河原	カメンカア
公儀山	コウギヤマ

為にその森林を公共のために保護したものと思われ、現代の防風林と言えよう。

神津高校から寺山を経て大六殿までの海岸沿いのママの森は、防風と魚付き林の目的で島役所が管理していたので公儀山と呼んだのではないか。

明治四〇年部落を襲った与種山の鉄砲水で、家宅を失った人達の為にこの公儀山は、その一部を開放されて宅地化されている。

古代の地方行政の「郷里制」の呼び名であろうか、村をいくつか併せた単位を「郷」というが、ここは単に家屋が多いという意であろうか。

郷村　ゴウムラ

中世の時代から歴代島の統率者として、神官と地役人を世襲した松江家の邸宅を御殿と呼んだが、その邸宅跡地とその背後の山を含めて御殿山という。今はそこの湧水を利用した酒造会社がある。

御殿山　ゴテンヤマ

金毘羅山	コンピ
砂原	サアラ
山行	サンギョウ

金毘羅宮の祠があり鳥居は海側に建てられている、鳥居を抜け森の外れはママの砂地で天草の干し場になっていた、このコンピの森と天草干し場は子供たちのチャンバラの遊び場であった、今は森の中に保育園が天草干し場は役場庁舎が建ち、昔の面影はほとんど残されていない。

サは「小さい」または「少ない」という意があり、サア・サワは「川筋」とか「湿地」をあらわす言葉であるので、水に関係があるのではないか。この海岸には滝川や浜山の沢から流れる湧き水が集まるので、昔は鰹節の製造場が数軒あったという。山からの湧き水が川筋を作っていたり、湿地の海岸であったかも知れない。他の説では「小さな原」ということかとしている。

難解な地名である。明治一五年三月、村の石田五郎左衛門、清水平右衛門など三〇名が「私共儀、従来新家に付き地所充分無に

下道	シタビチ
下の沢	シタンサア
七軒町	シチケンマチ

に付き、年分の活計上にも甚だ困り候により、当民有字山行地新開の儀お願い致し・・・・・・・・」と許可を受けて六反五畝一三歩を開墾したという記録が残されている。

シタは「下」である、ビチは島の方言で道を表わす言葉であると思われるので、下の道ということになろうか、それならば当然上の道があるのではないかと思われる。

この道は涛響寺前の村道を指すもので、「寺道」とも呼ばれている。

文字どうり部落の下手にある沢という意であろうか沢沿いに十余軒の家が建っている。

七軒ということから小さい居住区という様に考えられる、比較的新しい集落ではないかと思われる。

庄助平	ショウスケダイロ
須賀原（塚原）	スカッパラ（ツカッパラ）
せんき	センキ

他の説によれば「極く少数の家屋があったから、マチという語から部落の発生は、比較的に新しいものと思われるとしている。

神津ストア前の都道の下辺をいう、明治四〇年と翌四一年の水害で畑に被害を受けたので、上流部から幾つも堰堤を築いてあった、持ち主の屋号が地名化したものであろう。

なを神津ストアの辺りは、嘉右衛門平（カエモダイロ）と呼ばれた。

スカは海水・川水などによって生じた「砂地・海岸砂丘・川岸砂丘」などの意がある、ここは噴火によって土砂が堆積して出来た台地ではなかろうか。

また付近に流人の墓地があるので塚原であるとも言われるが、他の説でも海沿いの高地とか海近くの砂地の意を持ち、そうした原だからとしている。

センはセムの転で「迫る」の意がある、キはキシとす

れば「崖地」を言うことになる、山が迫っている崖地と言うことなのか。

大六殿　ダイロクデン

昭和四年忠霊塔をこの港を見下ろす大六殿に決めた時、そこにあった第六天の塔を、寺山のハバタへ移し忠霊塔が建てられた、昭和六一年になりこの第六天の塔は、元の大六殿に戻された、この第六天が大六殿の地名になったものと思われる。
またその塔は風化が進み、碑文を完全に読むことが出来ない。
第六天は多くの眷族を率いて仏道の妨げをすることから第六天の魔王とも言われている、また素戔嗚命を第六天として祭る地もあるという。
しかし何故ここに第六天の塔を建立したものであろう

旦那山見　ダンナヤマミ

大六殿つづきの神社表門、二の鳥居脇から入る小道がある、神津島港を見下ろすママ上で島人から旦那と

滝川	タケガア
追地	ツイジ
出川	デガア

啓われた、松江家の主が日々の港の賑いや、風・波の模様を見るために佇んだ所で、ダンナヤマミと呼ばれたと言う。

タケは「嵩」または「高い」で高いところの意がある、タキであれば「滝」の意になる、カアは「滝」や「水のある所」の意味があるのでカアと考えて滝のある地と言うことなのか。

ツイジはツキヒジで「土を盛り上げた所」「土塀」を意味する、
ここは人家近くの急傾斜地なので、以前崩壊防止の土盛りなどを行なったものか、
最近も崩壊防止の土留め工を行なっている。

七軒町の区域で、背後の山からの湧き水を用水枡に溜めていた、近くに出川姓の家があるが関係は分からない。

鉄砲場	テッポウバ
寺町	テラマチ
寺山	テラヤマ

松本一氏著「防衛された伊豆諸島」の中に、文政の八年（西暦一八二五年）徳川幕府の異国船打ち払令によって、幕府は伊豆諸島に対して鉄砲・槍などを支給して砲台・石積み・陣地を築かせたとあり、鉄砲・槍の訓練をした所が鉄砲場の地名の所以であると言う、また伊豆諸島に鉄砲が支給されたのは、同書によると文化五年（西暦一八〇八年）とあるので、ここが鉄砲場と名付けられたのはそれ以後になる。それ以前の地名は山行（サンギョウ）と呼んでいたものだろうか。

涛響寺付近の集落ということであろうか、下道と重なる様に思える。

涛響寺所領の山林なので寺山という、本堂裏つづきの墓地から海岸のママまでの広大な面積である。以前はこの山林の中を海岸に通じる道路が、幅三米程

取り付けられ森の中には目通し二・三米もある巨木が昼なを暗く鬱蒼として、二十三夜の石碑の前から石の坂道と緩い石畳みが川原へつづいていた。

二十三夜の石碑の右手の森には、いくら切倒してもまた芽吹いて来る「六本木」があり、魔物が棲むと言われその回りには石塊が積み重ねてあった。

夕暮れ海遊びから帰ってくる子供たちは、墓地から漏れてくる灯火に一層怖さが募り、息を潜めて駆け足で通り抜けたものである。

寛永一六年（西暦一六三九年）字矢割に開山した寺院は草庵程度であったが、宝永の頃（西暦一七〇四～一〇年）ボチ火事で焼失、また延享四年（西暦一七四七年）の下の沢火事で再び焼けたので、西の風上になる個人の土地を交換して今の地に移ったという。

土管川　ドカンガア

明治四三年村役場は女性の水汲みの労力を軽減するために、字滝川から陶管を繋いで石造りの溜池に水を引きそれから水汲みをさせたのでドカンガアと呼んだ今郷土資料館になっている旧村役場の消防器具置場は

長沢	ナガサア
八三郎沢	ハッチャブロジャア

ドカンガアの跡地に建てられている。
また川原を越えて寺山下の万次川もその溜池であったが、それも今は消防貯水槽になっている。

神津沢下流にあたる前浜湾の海岸の一部である。砂浜の渚は暴雨で神津沢から運ばれた転石の磯になっている。
長い沢と言うのであればこの磯より、神津沢を意味しているように思えるので、神津沢の下流と言うことであろうか、特にモーリ海岸と区分されていることは、神津沢と因果関係のある地名と言えるのではないか。

ハツはハツリで「削り」の意で、チャは「多くの湿地」サブであればサフで「沢」となる、ハツサブでロは後から付会したものか、削り取られた湿地のある沢で崖地の沢を言うように思える。
この沢も今は小学校の校庭拡張のための土砂で埋め立

られて、地域福祉センター・はまゆう保育園の敷地になっている。

はばた　ハバタ

ハは「端」ハタも「端」の意があるので、縁（ヘリとかフチ）を言うのであろうか。
今は道路改修が行なわれて以前の面影はないが、石の坂道と石畳の道でおそらく文化元年（西暦一八〇四年）から始められた寺の伽藍の建築材料を運搬するための道路として作られたものではなかろうか。
なをこの頃まで近くで民宿「はばた屋」が営業していた。

ばばあ道　ババアミチ

以前コンピの森から蛇沢の縁を回るだらだらの坂道で、一と雨来ると砂が流れ道が掘られて歩くことが出来ない程になった、それでもモーリの浜への近道であったのでよく利用した。
しかし何故ババアミチと言ったものなのだろうか、ハは「端」アマは「海」の意になるので、ハアマは砂浜を表わすという、またハマ・ハバ・ババ・ママと変化

文助山見　ブンスケヤマミ

蛇沢　セエビジャア

していると言う説もあるのでババアミチは、浜の道と言うことになるのか、

武道館の辺りのママの上にあり、山見は小高い海の見透しの良い所に座をしめ、陸上から魚群を見つけて群れの進行方向・網打ちのタイミングなどを海上の船に知らせる役で、老練した人が選ばれた。ここはその人の名が地名化したものであろう。

セは「狭い」ヒは「水路」と言う意があるので、狭い水路と言うことになる。明治四〇年と翌四一年の水害では、この沢に泥流が押し込み沢を拡げたものと言う、水害後蛇も棲むようになったので、セビ沢が蛇沢に転化したものか、しかし島の方言では蛇をセエビとも発音する。他の説では、長い沢であった、また蛇が多くいたからとしている。

平たん沢	セエタンジャア
深い道	フカイドウ
宝崎	ホウサケ
防風	ボウフ

セイタはセトの転で「狭い所」と言う意がある、山が両側に迫っている地を表わすと言う。他の説では、人名からとしている。

他の説によれば、奥深い地であるからとしている、フカは「深く入り込んだ入り江」またはフケの転で「湿地」を言うとある、イは「井戸」ではなく「水溜り・泉」の意があるので、深い水溜のある地と言うことかも知れない、ドウはドで「所」の意がある。

ホウは「宝」サケはサキで「前」の意がある、宝前であれば神の前または仏前の意味を持つ、しかし宝前とするとその神社または寺院の存在が課題となる。

本来は字宮原の一部のように思える、ホウブルは「葬る」で墓所の意となり、ホウフンは「方墳」で古墳の形式である。

山下彦一郎氏著の「神津島古跡の解明」の中に「松林になっているが、前方後円式の古墳を思わせる白い砂

がある、ここには石造の神殿があり東方に玉石を敷き均べたことが仁明天皇記に載っている」とある。それが古墳であればホウサケ（宝前）とかミヤッパラ（宮原）とも繋りがあることになる。

他の説では、浜防風がが生えているのでとしている。

洞　沢　ボラッチャア

ボラは島の方言で「穴」とか「洞穴」を表わす、深い谷ということなのか、沢と言うので山峡の深い沢と言うことのように思える。

坊主山見　ボウズヤマミ

本来山見とは漁業の魚見役を呼ぶ名だが、何時の時代でも漁業の盛衰は島の暮しにかかわる重大な関心事であった、涛響寺の住職が日々の漁模様を気懸りにするのは、極く当然のことであったと思われる。寺山の二十三夜様の石碑の裏を通りママの上の港が良く見える松の木の根本をそう呼んだ。

前浜	マエハマ
宮原	ミヤッパラ
宮原の上の山	ミヤッパラノウエンヤマ
明神山	ノージンヤマ

前の浜は地形的に見て、神の前と言う意味があるように思える、前浜とは以前神津島港付近だけの地名であったが、今はモーリ長沢の海岸を含めて前の浜と言う様になった。

宮の原と言うことであればその宮はどこにあったのだろう、物忌奈命神社では少し距離がありすぎる嫌いがある、ボウフ（防風）に神社があったとすれば意に適うのであるが。

宮原の上部の山と言うことのように思える。

ノージンと呼び、物忌奈命神社の広大な社有地を言い、ミョウジン（明神）がノージンとなったもの思われる。

この森は子供たちの格好なチャンバラの遊び場で、根本が朽ち乍ら数百年を経た巨木が茂り、初夏の頃には境内の桜の木に登りその実を採るため枝をよく折った

森　浜　モーリ

元屋敷　モトヤシキ

ものでは宮司によく怒られたものである。

モリは、森で「守り」の意があるとされている、島根県では神が守る地のためにモリと呼ばれたと言う伝承が残されている、したがってモリは「守るべきもの」の意志が篭められている様に思える。

また古くは「モグ」を「モリ」と言ったため「崖地」を指す場合もあると言う、オリは「下がる」また「崖」と言う意があるので、守るべき森の下の浜と言うことだろうか。

モーリはコーギヤマの保安林のことのように思える。

明治四〇年七月の水害で住居を失った人達は、他に土地を求めて移って行った、被害を受けた跡地には、麦やさつまいもを作り元屋敷と呼んだが、元屋敷と呼ぶのは被害を受けた土地に限っているようである。

矢割	ヤーリ
横川	ヨコッカア
与種	ヨタネ
汚ら沢	ヨゴランサア

ヤは「岩」の意がある、アリは「山」ハリであれば「開墾」ワリならば「割」になる、ヤアリとすれば岩の山か、またヤハリで岩地を開墾した所と言うことなのかも知れない。

ヨコは「横」であろう、カアは果して「川」若しくは「池」「水溜り」など水に関係があるのだろうか、これは「側」のカアで、横側と言うことではないか。

ヨは「限られた間」または「枝別れした稜線とか谷」を表わす意味がある、タネは「棚とか谷」の意があるので、高処山の山裾の棚状の地と言うことなのか、与種神社があるのでそれが地名になったものか、因みに与種神社が祭られたのは、元文（西暦一七三六年）の時代以降になるように思える。

女性は月のものが始まると家族と別れて汚ら屋と言う小屋に入り別火の生活をした、それは漁業の障りがあるとか、信仰上の忌み事であったものと思われる、

この小屋にはほぼ一〇日程篭っていたものと言う、その小屋があったのでそれが地名化したものであろう。

文字どうり漁船を陸地に引き上げる場所である、最近は漁船の大型化と隻数が増えたので、私有地を買収して拡張されている。

船上場　フネアゲバ

川尻と言う地名は全国的に多いと言う、川の下流部に土砂が堆積して新しく開拓された地を言うとしている。けれどもこの土地は舎人川つづきの尾根になり、また滝川はこの尾根を下がった沢になるので、土砂が堆積したとは考えられないが、滝川の下流部一帯を総称した意であろうか。

川尻　カアシリ

カシは「上」または「痩せ地」「傾斜地」を表わす言葉であり、シリは「後方」「白土」「灰色がかった土のある土地」とも言われたいる。

傾斜地で白い土のある所と言うことか、ここには島で

菊若	キクワカ
けだつ沢	ケタッチャア
河原端	カアラッパタ
浜山	ハマヤマ

「カタ」と呼ぶ固い地層がある。

キクはククの転で「高い所」の意があり、ワカはハカの転で「剥ぐ」であるので、高い崖地の所と言うことか、またキカフは「傾く」の意があるので傾斜の強い崖地とも取れる。

伊豆半島の方言でケタは「断崖」の意味であり、キタ・キダは「刻む」で階段状の地形を言う、チャアはケタッの撥音に続く沢の意なので、階段状になっている沢と言うことなのだろうか。

これは河原の端のと言うことではなく、河原沿いの土地と言うことであろう。

ハマは「浜」であるので、浜続きの山と言うことなのか、浜の近くにある山と言うことなのだろうか。

穴の山の部

○穴の山（アナンヤマ）
○赤ん沢（アカンジャア）の一部
○おおやせ（オオヤセ）
○鳥居が沢（トリイガサア）
○畑がたいろ（ハタキヤタイロ）の一部
○大松が平（オウマツガヒラ）の一部
○返浜（カヤス）
○走る間河原（ハシルマガアラ）の一部

穴の山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
穴の山	アナンヤマ	他の説を見ると穴が幾つもある所としているが、窪地のある山と言う意ではなかろうか、けれども石塊が幾層にも堆積しているので、風穴様のものがあったのかも知れない。
赤ん沢	アカンジャア	語感からは、明かぬ沢のように思えるが、アカは「明るい」「開く」またはハカで「崩壊」の意があ

大松が平	オオマツガヒラ
おおやせ	オオヤセ

るのではないか。

他の説を見ると周囲や沢が赤いのでとある、島で「アカネンバン」と呼ぶ粘土質の土があるのだろうかここはいずれにしても崩壊地のある沢と言うように思える。

マツは「捲く」「曲がる」または「真土」で粘土質の地の意があるとされているが、ここは大松が生えていたと言う伝承があると言うので、その大松に由来する地名で大松が生えていた平地と言うことであろうか。

ヤセは「痩せ」で痩せ所は石などが多く、痩せ地を表わす古語である。

またヤは「岩場」「岩石」を言いセは「瀬」で海岸の意がある、オオはオフと考えれば「負う」で山を背負うと言うことになる。

ここは山を背にした岩場の海岸と言うことか。

返浜　カヤス

カヤは「谷」または「高地」を意味している、スは「州」で砂浜の意があり、谷または高い土地の下にある砂浜と言うことか。
ここは、神話の時代に釣りの好きだった伊豆の事代主神が、しばしば神津島で釣りを楽しまれたが、釣りに興じらて仲々お帰りにならないので、お后神の阿波の媛命は夫神を探しに神津島に出掛けられたが、波が高くて舟をこの白浜に付けることが出来ず、やむなく伊豆の国へ帰られた、それからこの浜を「返す浜」と名付けられたと言う伝承が残る所である。

鳥居が沢　トリイガサア

鳥居に関係のある地名とも聞くが、鳥居を立てた神社は何処にあったのだろうか。
トリは「崖」の意がありイは井の転で「川」または「水」のことであろう、水の流れる崖地の沢と言うことであろうか。

走る間河原　ハシルマガアラ

畑が平　ハタキヤタイロ

走る間の磯の上に続いている沢で、この上部に賽の河原がある。天上山系の谷や沢からの雨水いがこの沢に流れ込み、土石の河原を作っている、ハシリは「土石混じりの雨水が流れ走る状」を表わす地名であろうか。

ハタケと言うが畑耕作をしたとは思えない、ハタは「端・側」などでタケは「小高い所」、タイロはタイで「平地」の意であろう。小高い平地の端か、台地上の側の地とも取れる、尚ケヤはコヤ・コユの転で「崩れ地」と同義語であるので台地の端の崩れ地と言うことだろうか、ハタケヤタイロとも呼ばれると言う。

榎木が沢の部

○榎が沢　（イノキガサア）
だいだいあらし（ダイダイアラシ）
山見　（ヤマミ）
水の沢　（ミズンサア）

日向　（ヒユウガ）
走り　（ハシリ）
八右衛門下がり（ハチエモサガリ）

榎が沢の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
榎木沢	イノキガサア	他の説では榎が多く生えている所としているがどうか、イノキとすると「猪の牙」となり、意が通じないノキは「崖地」を言うので、大沢下がりの崖地のある沢と言うことなのか、イは接頭語と考えるとうなづける気がする。
日向	ヒユウガ	日に向かう地としての意もあるが、それより東の「ヒムガシ」の転でヒユウガになったと思われる。
だいだいあらし	ダイダイアラシ	海岸の砂が風に吹き上げられて出来た、砂地の急傾斜地である、アラシは転がすのアラスで正月の注連飾りの橙を上から転がして、その距離を競ったもので、それが地名化したものと思われる。

走り	ハシリ
山見	ヤマミ
八右衛門下がり	ハチエモサガリ

かってはサンドスキーも楽しめた所であった。

ハは「端」シリは「端・末」の意であるが、ここはハシリ「走る」と言うことであろう。多幸湾の海岸が砂から転石の磯に変わる辺で、風雨の時は天上山の中腹からの石塊や土砂が崩れ落ちて来る所であった、往時落ちてきた石塊で命を失った人があったので、ここは急いで走り抜けろと教えられたことがあるので、「走る」のハシリではないかと思われる

山見は元来漁業の魚見のことである、だいだいあらしの松の陰にむしろを敷いてあった。そこにはいつも顔見知りの老人が居て、むしろの端を空けてくれた思い出がある。

赤羽根から秩父山林道を大沢寄りに入り、展望台の手前から榎木が沢に下る道があった、道上に八右衛門家の山や畑があったのでそれが地名になったものと思われる。かっては小学校の遠足の道路であった。

水の沢	ミズンサア	文字どうり水の沢と言うことであろう、ここは村営のロッヂと日向神社との両台地に挟まれた沢で、かなりの量の水が流れている。 水の流れている沢と言う地名であろう。
大沢の部 ○大沢（オオサア） ○榎が沢（イノキガサア）の一部 ○赤羽根（アカバネ）の一部 ざなり（ザナリ） ○惣四郎（ソウシロウ）の一部 ○高処山（タコウドウ）の一部 ○しったい（シッタイ）の一部		
大沢の部		
字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
大沢	オオサア	オウは「負う」で山などを背負う意がある、サワは古語では「谷」を言うことが多いが、ここは島の創世

期の頃の火口臼の跡地であると言う。
地質は細かい砂地なので長い期間にその火口を埋めて行ったものと思われ、全体的に中央部が大きな窪地になっていることが分かる。
大きな沢と言うことであろうか。

惣四郎	ソウシロウ
榎が沢	イノキガサア
高処山	タコウドウ

ソウはソで「磯」の略称である、シロは「丘陵上の平坦地」と言う意がある。
これによれば磯の上の平な台地と言うことになる、他の説によれば人名からとしている、この台地は島でも一番古い噴火地で、シヨウシロウとも呼ばれている所でまた難解な地名でもある。

二九頁参照

タコは「高い」でオは「丘」または「段丘」ドウはドで「所」の意になる。
これは高い段丘状の山を表わすものなのか、ここは屋根の葺き替えの共用の萱場であった。

赤羽根

アカバネ

古語でアカはハカの転で「崩壊地」とか「高い地」であるとし、ハネはハニで「粘土質の土地」を表わす意であるとするので「粘土質の崩壊地」または「粘土質の高い地」と言うことになるがすっきりしない。

村内に屋号を「赤羽根」と呼ぶ家がある、当主の話によれば、

「曽祖父はもと尾張の国の人で、かなり裕福な旅館の跡取りであった、若い頃に何故か仏門に帰依し、長野平の善光寺で修行中、仏教の信心篤い神津島と言う島を知り、早速島に渡りこの赤羽根に小さな庵を建てて念仏三昧の日を送る様になった。

その後島の女を娶り屋号を「赤羽根」と呼ばれるようになった」と言う。

当時赤羽根の峠を上り切る手前の、松の枝が被さる窪地に地蔵菩薩を祀る石の祠があったが、そこが庵の跡であったと言う。

最近はトウゲと呼ばれるようになり、地蔵菩薩はその

しったい	シッタイ
ざなり	ザナリ

祠とともに道傍に据えられている。

シッとかシタは「垂る」で傾斜地または崖地を言うタイは「平ら」の意がある、タは「所・場所」を言うので、ここは緩い傾斜のある土地と言うことのように思える。

ザはジヤで砂のことであろう、ナリは「緩傾斜地」を表わす言葉で、砂地の緩い傾斜地と言うことか、ここは秩父山への上り口で一雨降ると砂地の上り口は、そのたびに形を変えて作り直す必要があった。

大沼の部

○大沼（オオノマ）の一部
○なきり（ナキリ）の一部
○長大（チョウダイ）
○さいん原（サインバラ）の一部
○河童池（カッパイケ）
○横吹（ヨコフキ）の一部
○中原（ナカッパラ）の一部
○忠四郎沢（チュウシロジャア）
○五郎兵沢（ゴロベエエジャア）
○おそめ（オソメ）の一部

字名及び地名	島での呼び方
大沼	オオノマ
横吹	ヨコフキ

字名及び地名考その他

地形的に見るなら凹の間（オオノマ）と言うべきだろうか、オオ・オホは美称であるとし、オウは山などを背負う形を言うとしている、ノは「人手の入らない原野」マは「間」で山と谷の間とか山と山の間と言う意があるとしている。
島の言葉ではノマとかノはコシに当たる崖地や急傾斜地を言うので、コシのある地名であろうか。

フキまたはフクはフケの転で「袋状に突き出している地形」を意味していると言う、風が横から吹くと言うならば、ヨコップキとなって良いように思える、またフケには「湿地」の意もあるので、それらも考えたい。

なきり	ナキリ
中原	ナカッパラ
長大	チョウダイ
中四郎沢	チュウシロジャア

ナキをナギの転とすれば「焼畑」の意がある、山一崩れの緩い傾斜地は地味も肥え農耕に適しているからと言う、またナは「野・土地」の意でキリは「断崖の端」を表わす。
ここは平地の端とか崖地の端にある地と言う様に思える、他の説ではナ（魚）を切った事象があったのでとしている。

ナカは「間の中」の意がある、しかし中の原では地形や条件が浮かんでこない、またナカには「入り組んだ谷」を言う意味もあるので、谷が入り組んだ中程の原を言うのか。

他の説によれば家屋にある「帖台」と関連があるのかとしている、チョウは「しぼむ」の意があり、タイは「平」を表わすので、しぼんだ平地と言うことになるのか。

他の説では人名によるものであろうとしている、

さいん原	サインバラ
五郎兵沢	ゴロベエジャア
河童池	カッパイケ

サエモンバラとも呼ぶ、他の説では先原で（サインバラ）島の中央からずっと端にある原だからと言う意か、としている。
サキであれば「先端・谷」とか「裂き」で張り出した段丘の端または谷の端とも取れる、
サは「狭い」イは「居」で所で狭い所となるが、どうしても狭い原ではすっきりしない。

地名と同じ屋号を持つ家の所有地もあるので、新らしく開墾した土地かも知れない

他の説によればここにまつわる伝説に関係があってとしているが、付近の浅い沢に湧水池があるので河童の伝承が生じたものだろうか、特に島には河童の話は無いように思われるが、カッパは合羽でもあるのでそれにまつわることも考えられる。

おそめ	オソメ	オは接頭語で、ソメはソネの「岩石の多い地」とか「石交りの固い地」などの他「石交じりで川沿いの小高い地」の意がある、小川沿いの段丘と言うことだろうか。

お観音の部

○おかんのん（オカンノオ）
○かよう（カヨウ）
○櫛が峯（クシガミネ）の一部
○たらいが沢（タライガサア）の一部
○みなかわ（ミナカア）
○大たいろ（オオタイロ）の一部
○亀次郎（カメジロウ）の一部
○じようごろ山（ジョウゴロヤマ）
○針山（ハリヤマ）
新庭（シンニヤア）

○観音の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
おかんのん	オカンノオ	傾斜の強い高い山を背にした海岸の台地に、西国三十三ヶ所の札所寺の本尊仏を刻んだ石仏を並べて祀る島の札所のある所で、札所の下に石積みの囲いの中に

金色の観音仏像二体を祀る庵があるので、ここを観音浦またはおかんのうと呼ばれるものであろう。また庵に祀る観音仏は、この海岸に漂着したものと伝えられる。

大たいろ	オオタイロ
かよう	カヨウ
亀次郎	カメジロウ

タイロは「平地」または「台地」の意があるように思える、オウは「負う」で山などを背にした状態と考えられるので、大きい平地では無く山を背負っている台地などの意があるように思える。

カヨウは「入り交じる」「交差する」また「寄り合う」などの意があるのでここは幾つもの沢が合流する所と言うことだろうか。

古語でカメはカマの転で「谷」のことを言い、またシロは「砂地」のことを指すことが多いと言う。カメシロであれば谷間の砂地の所と言うことか。

櫛が峯	クシガミネ
じょうごろ山	ジョウゴロヤマ
たらいが沢	タライガサア
針山	ハリヤマ

ここは天上山つづきの峰でその形からの地名と思われる。

櫛状に大きく湾曲している尾根の姿は、優美な峰で天上山の展望地から眼下に見下ろすことが出来る。

人名であろうか、古語の中にも適した類似語を見付けることができない、また島呼びの発音でも人名が地名化したように思えてならない。

タラは「垂れる」でなだらかな傾斜地を表わす意であるので、緩やかな傾斜のある沢と言うことか。タライを「平ったい」とは考えにくい。

ハリは普通「開墾地」を表わす言葉であるが、また「山の尾根の張り出した所」と言う意味もあるので、ここは山の尾根のつづきの地と言うことか、ここに新らしく開墾をして畑を作る理由がわからないのでこのハリは、張り出したと言うことのように思える

みなかわ

ミナカア

新庭

シンニヤア

ミナは「水無し」とか「水の」と言うことになる、カアは「池」「湿地」または「沼」などを表わすが、それならば、水の池とか水の湿地となり、水とことわることはない、このカアは側の意になるのではないか普段水の出ない崖沿いの地となるのか。

シンはシツの転で「傾斜地」の意がある、またニヤは「丹」で赤土となるので、ここは赤土の傾斜地と言うことか。

鍛治山の部

○鍛治山（カジヤマ）
○方返り（ホウガエリ）の一部
○仲吾（ナカゴ）
○唯の池（タダヌケ）の一部
○桑沢（クワザア）の一部
○かん川（カンカア）

○三笠（ミカサ）
○ならい向（ナライムキ）
○たこう（タコウ）の一部
○ごぢの沢（ゴヂノサア）
河原端（カワラッパタ）の一部
○沖の沢（オキンサア）の一部

○大　里（オオリ）の一部　　○牛　沢（ウシジャア）の一部

鍛冶山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
鍛冶山	カジヤマ	他の説では鍛冶職人に関係があった山故としているが、村落からの距離から見ても、その必要度から考えてもうなずけない、カヂはカシの転とすれば「上」「傾しぐ」または傾斜地など崖地・崩壊地の意がある。谷筋の沢もしくは崖のある下手の沢と言うことのように思える。
三笠	ミカサ	ミカは「磨く」で「水欠く」の意であると言う、またミカサは「笠の形」で山容を表わし、カサは「上」でもあると言う、水に侵食された地を意味するものではないか。
方返り	ホウガエリ	ホウはオフの転で「山を背にした地」「崖地」を表

ならい向	ナライムキ
仲吾	ナカゴ

わし、カアリはカエリの転と考えられ「裏返し」の意で、曲がってまた曲がるまた下って上ると言う意味になるのでこれは、山を背負う曲がり道のある地と言うことかも知れない。

ナラ・アイは「平坦地の間の地」と言う意味があるが、ムキ（向き）と言う方角を指す言葉があるので、ナライ（北東）ムキ（向き）と解すべきか。他の説でも西向き（西を向いている）三宅向き（三宅島の方向を向いている）と同様にここは北東を向いている地だからとしている。

ナカは「中」「中心」の意で、ゴは「所または場所」「崖地・崩壊地」などを言う場合があるが、その中とか中心とは何を指すのか。単に崩壊地の中とか中心と言うことだけなのであろうか、難解な地名と言える。

たこう	タコウ	タコは「高い」の意で、オは「丘とか段丘」などの意になる、ここは高い階段状の地を表わすものであろうか、同じく榎木ヶ沢に多幸、大沢に高処山など類似の地名がある。
唯の池	タダヌケ	タダは「台地」で、ヌケはヌキの転で「崩壊地とか崖地」を言うので、ここは崩壊地のある台地形の土地と言うことか。
ごちの沢	ゴヂノサア	コチ・ゴシは「骨太でごつごつしている様」を言うので、起伏が激しい沢なのか、また石塊などの多い沢と言うことなのか。
桑沢	クワザア	他の説では、桑の木が多くあった沢であったからとしているが、クハは「崖地」とか「急傾斜地」を表わす言葉で、崖地のある沢または急傾斜地の沢と言うことであろうか。
河原端	カアラバタ	神津島村の部参照

かん川	カンカア
沖の沢	オキンサア
大里	オオリ

カンはカミで「上」の意と考えられる、またカアはカブの転で「傾き」の傾斜地を表わすのではないか。そうであればここは傾斜地のそれも上の部分をを言うのではないか。

オは接頭語ではなかろうか、オフであれば「山を背にした」となる、またキは「高地」の意である。オキは「内陸から見て海よりの地」を通常沖と読むので、干拓地とか天井川の意味がある、これは高い地形を背負っている沢と言うことなのか。

オは接頭語ではないか、オリは「下り」で「崖地」などの急傾斜地を意味しているので、ここは急傾斜の地と言うことかも知れない、他の説では、風が強いことから「煽る」でアフリが地名化したものとしている。

牛沢	ウシジャア	他の説では牛（野牛のこと）が多くいた所とあるが地形的には野牛と関係があるのかも知れない。ウは「大きい」シは「石または岩石」を言うが、ここにそのような大石が果たしてあるのだろうか。

鴟穴の部		
○鴟穴	（カゴメアナ）	
○又兵エ沢	（マタベエザア）	
○塔の沢	（トウノサア）の一部	
○しよくどう	（ショクドウ）	
○鷲谷沢	（サギヤンサア）の一部	
喜平沢	（キセイジャア）	
○面房	（メンボウ）の一部	
○古道	（フルミチ）の一部	
○治平沢	（ジセイジャア）の一部	
○ししようけ	（シシヨウケ）	
○ありま	（アリマ）の一部	

字名及地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
鴟穴の部		
鴟穴	カゴメアナ	他の説では山林に囲まれた「カゴム」所であるとしているが、古語ではカゴは「崖地とか崩壊地」の意が

面房	メンボウ
又兵エ沢	マタベエジャア
古道	フルミチ

ある。
また穴と言う地名を考えると文字どうり「かもめの巣穴」とも取れる島の言葉では鴎はカゴメと発音する。

これも難解な地名である。
こじつけの感があるが、メンは「面」で平らな意になる、ボウはホの転で「秀いでる」とか「高い目立つ所」の意があり、平らな高台と言うことなのだろうか、他の説によれば房州方面に面している為かとしているが、ここより展望できるのは伊豆半島であるのでどうであろうか。

マタは「沢などが分岐する様」を言うとある、ヘイは「辺」で陸地の端と言う意があるので、ここは二股に別れる沢の地と言うことだろうか。

フルは「古くから開けた地」を意味すると言う、ミ

塔の沢	トウノサア
治平沢	ジセエジャア
しよくどう	ショクドウ

チは「道」なので、ここは新道が出来たので従来の道を古道と呼んだのだろうか。

トウはトホの転で「湿地」の意になる、またノは「傾斜地」を表わすものなので、ここは傾斜のある湿地の沢と言うことだろうか。

ジはヂの転ではないだろうか、ヂは「砂」の意でありセイはヘイで「閉じる」とすれば、止める塞ぐなどの意になる。
ここは今のように道路が整備されない頃は、一雨毎に道筋が掘られて交通ができなくなるような所であったまたは治平と言う人名に関わりがある所なのか、自然地名とすれば砂地の狭い所（塞ぐ）などのように思える。

ショはシホで「萎む」で陸地側が狭まっている意である、クドウはクドレで「崖地・崩壊地」があるので狭まった崩壊地を表わすのではないか。

ししようけ	シショウケ	シは「石または石のある磯」の意がある、ショウケは「上と下」の関係かも知れない。ここは上の方も下にも石の多い磯と言うことではなかろうか。
鷺谷沢	サギヤンサア	サキは「先端」とか「谷」の意がある、ヤは「岩の形」とか「湿地」などの意があるので、ここは谷間の湿地の沢とか、沢の先端に岩場のある沢と言うことなのだろうか。
ありま	アリマ	他の説によれば「割れ目」の転化であるとしている荒磯をアリソと読むがこれでは十分に説明できない、アリはワレで「割れ」マは「場所」の意になるのでここは割れ間が正しいと思われる。
宮平沢	キセイジャア	ここは自然地名ではなく、この土地の所有者の屋号が地名化したものであろう。

金長の部

○金長（キンナガ）の一部
○なきり（ナキリ）の一部
○さいん原（サインバラ）の一部
○柑が沢（コウジガサア）の一部
○ながいも（ナガイモ）
○中原（ナカッパラ）の一部
○ごんごん山（ゴンゴンヤマ）
○ぐみ山（グミヤマ）の一部

金長の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
金長	キンナガ	キンはキで「険阻な」であろう、ナガは当然に「長い」である、ここは険阻な長い崖地または刻み目のある地と言えないだろうか。
ながいも	ナガイモ	ナガは「長い」で文字どおりの意であろう、またイモはウモの転で「土砂などで埋まった川とか沢」と言う意がある。この地は土砂崩れなどで埋もれた長い沢と言うことなのか。

なきり	ナキリ	大沼の部参照
中原	ナカッパラ	大沼の部参照
さいん原	サインバラ	大沼の部参照
ごんごん山	ゴンゴンヤマ	難解な地名である。ゴンをゴムとするならば川瀬の曲がる様を言う、強いて自然音を表現したとすれば、ゴンゴンはかなりの量の水の流れる音とか、湧き出して来る様を表わしている。この地にそのような川や湧水池などがあるのか、その外この地に残る伝承などがあるのだろうか。
柑が沢	コウジガサア	他の説によれば、かって工事を行なった沢かとあるが、工事と言う言葉は比較的に近代のもので、多くは道普請とか川普請など通常普請と言う言葉を使用しているのでいかがであろうか、コウジをコシとすれば「

ぐみ山	グミヤマ

懸崖」とか「傾斜地」と言うことになる。ここは両側から急傾斜地に挟まれた沢と言うことなのだろうか、また文字どうり柑子（コウジミカン）が栽培されたことがあったのだろうか。

クミはクマで「屈曲した」「入り組んだ」とか「奥まった所」その外「暗くなる山陰」などの意がある。この地は入り組んでいると言うことだろうか。他の説では植物のグミが数多くある山だからそれが地名化したものとしている。

黒島の部

○黒島（クロシマ）

黒島の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
黒島	クロシマ	シマは海に浮かぶ島の意だけでなく「縄張り」とか

神戸山の部

○神戸山（コウベヤマ）

神戸山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
神戸山	コウベヤマ	神戸と書いてカンベ・コウベ・ゴウド・ジンコと読む地域は全国的にかなり多い、これは神社の所有地で「一定の区域」を言う場合がある。 ここは天上山噴火で噴出した岩石や礫などが堆積した所で、いまはしだや潅木が密生している。 これに対して白島は、風雨のために地表の砂が露出しているのでシロシマと言う。 ここは潅木が密生して黒く見える所から、黒島と言うことであろう。

ここに住む人達は神社の清掃・神田の耕作・またその下働きをする、神社の付属住人でその住む区域を神戸と言ったものと言う、コウベヤマが神戸山であればその神社の所在が解明されなければならない。
コウはコまたはコシで「高い・急傾斜地」の意で、べはへで「辺」「巡る」とか「端し」の意があるので、端の高い山と言えないだろうか。

砂糠山の部
○砂糠山（サノカヤマ）

砂糠山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
砂糠山	サノカヤマ	サは「狭い」ノカはヌキまたはヌケで「川や谷に沿う崖地」の意がある、また火山性の台地が急崖をなす地形をも言う場合があるとも言う。

錆　崎　の　部

○錆　崎（サブサケ）

○めいし（メイシ）の一部

錆　崎　の　部

○牛　沢（ウシジャア）の一部

○こぼう（コボウ）の一部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
錆崎	サブサケ	寒崎とも書かれているがどうか、岩場に温泉の結晶が付着しているから錆崎であると聞いたことがある。しかしサブは「荒ぶ」で風浪が激しく打ち当てる様を言うように思える。ここは荒ぶ崎（スサブサキ）と言うのではないか。
牛沢	ウシジャア	鍛冶山の部参照
めいし	メイシ	メは「狭い所」とか「辺り」と言う意がある、イシ

は「石」とか「石の多い磯」を表わす言葉であるのでここは狭い石の多い磯と言うことになるのではないか他の説では静岡地方ではメイシのような所はホトリと言うとある。

コは「高い所」の意であり、ボウはホまたはホウで「秀でた峰」または「紡錘状の地形」を表わしているが、付近の岩などにそのような形のものがあるのか、新しく道路が出来る前は、急勾配のくねった坂道が続いていた所で、坂上の石仏は今道脇の石垣の中に据えられている。

こぼう　コボウ

沢尻の部

○沢尻（サアジリ）
○めいし（メイシ）の一部
○方返り（ホウガエリ）の一部
○桑沢（クワザア）の一部
○大里（オオリ）の一部
○おおり沢（オオリンサア）
○水の沢（ミズンサア）の一部
○こぼう（コボウ）の一部
○亀の甲（カメンコオ）の一部
○牛沢（ウシジャア）の一部

字名及び地名	島での飛び方	字名及び地名考その他
沢尻	サアジリ	サは「狭い」であり、サハは「谷川」と同じ意味に使われる、シリは「谷川の流末」を表わすので、ここは狭い谷川の流末のある地と言うことだろうか。浜とか磯に関係のある地名であっても不思議ではないように思えるのだが。
おおり沢	オオリンサア	大里の下の沢で、ここは明治四〇年と翌四一年の大雨の出水で深く切り込まれ、その土砂は沢尻湾の磯に流れ込んで、今のような砂浜を作ったと言う。
めいし	メイシ	錆崎の部参照
水の沢	ミズンサア	文字どうり水の流れている沢である、ここはおおり

方返り	ホウガエリ	沢から続く深い沢でこの水源からの湧き水が、おおり沢を切り崩したものと言う。現在もかなりの量の水がこの沢を流れ、キャンプ場などで使用されている。
こぼう	コボウ	鍛冶山の部参照
桑沢	クワザア	錆崎の部参照
亀の甲	カメンコウ	鍛冶山の部参照 ここは沢尻海岸の手前の磯で、磯の中ほどに亀の甲羅に似た岩があるので、それが地名化したものと言う。
大里	オオリ	鍛冶山の部参照
牛沢	ウシジャア	鍛冶山の部参照

惣四郎の部

○惣四郎（ソオシロオ）の一部

惣四郎の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
惣四郎	ソオシロオ	大沢の部参照
このくちが沢	コノクチガサア	この口と言う入り口が狭く中は袋状に広がる入り江があり、子宮（コブクロ）の口と言う意見があるが、ここはその入り江に続く沢なので、このくちが沢と言うのであろう、

○この口が沢（コノクチガサア）

多幸の部

○多幸（タコオ）

○釜が下（カマンシタ）

○荒川（アラカア）

○中駄（ナカダ）

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
多幸	タコオ	タコは「高い」の意で、オは「丘または段丘」の意があるので、高い階段状の地と言うことだろうか。
荒川	アラカア	アラカアは「洪水を起こしやすい川沿いの地」と言う意と、「流れが激しい川沿いの地」の意もある。ここは流れの激しい川のある地と言うことであろう。
釜が下	カマンシタ	カマはカブで「傾し」と同系の侵食を表わす言葉である。カマ・カブには「川岸とか水際」などの意もあるので、海沿いの崖下の地と言うことかも知れない。
中駄	ナカダ	ナカは「中」の意、カダはカタの転で「台地状の肩または端」を言うので、台地の端の意を表わすのではないだろうか。そうであればナは接頭語となる。

高　嶺　の　部

○高　嶺（タカネ）の一部
○ぼ　ら（ボラ）
○ひらん沢（ヒランサア）
○桑　沢（クワザア）の一部
○おがしら（オガシラ）の一部

○舎人川（トノリガア）の一部
○方返り（ホウガエリ）の一部
○浜　山（ハマヤマ）の一部
○亀の甲（カメンコオ）の一部

高　嶺　の　部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
高　嶺	タカネ	タカは「高い」でネは「根・嶺」あるいは「沼」とか「野」などの意があり、また「根」には土地を言う意味もある、ここは高い所の地と言うことのように思える。 他の説によれば、鷹がよく飛来した根があるからとしている。

舎人川	トノリガア
ぼら	ボラ
方返り	ホウガエリ
ひらん沢	ヒランサア
浜山	ハマヤマ

トネリは「舎人」で「殿守り・殿待」で、古くは天皇の側近で奉仕することを任務にしている者の称である、この地がそのトネリに通じるものが果してあったのだろうか。

トノはタナの転と考えれば「丘陵とか段丘」を指す、カアは「池とか湧き水」を言うことからここは水の出る丘陵と言うことであろうか。

ボラはホラで「洞・洞穴」と言うことである、ここはホリとかホルで「掘れる」であろう、砂地の地質で雨水に侵食されやすい地と云うことではないか。

鍛冶山の部参照

ヒラは「傾斜地・坂または平地」などを指すこともあるが、ここは傾斜のある沢を言うのではないかと思われる。

神津島村の部参照

桑沢	クワザア	鍛冶山の部参照 沢尻の部参照
亀の甲	カメンコオ	
おがしら	オガシラ	カシラは「頭」で上の方を指す意である、またカシは「傾ぐ」の傾斜地でもある、「痩せる」の痩せ地の意味もあるが、ここは傾ぐ（カシグ）の傾斜地を言うのではないか。 なを、オは接続詞と考えられラは場所や方向を指す接尾語と思われる。

滝川の部

○滝川（タキガア）の一部
○西向（ニシムキ）
○高嶺（タカネ）の一部
○せんき（センキ）の一部
○川尻（カアシリ）の一部

○浜山（ハマヤマ）の一部
○舎人川（トノリガア）の一部
○唯の池（タダヌケ）の一部
○砂原（サアラ）の一部
○おがしら（オガシラ）の一部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
滝川	タキガア	神津島村の部参照
浜山	ハマヤマ	神津島村の部参照
西向	ニシムキ	ナライムキと同じように、西の方向に向いている地と言うことであろうか。他の説では風向きに対する地名としている。
舎人川	トノリガア	高嶺の部参照
唯の池	タダヌケ	鍛冶山の部参照
せんき	センキ	神津島村の部参照
砂原	サアラ	神津島村の部参照

高処山の部

○高処山（タコウドオ）の一部
○鉄砲場（テッポオバ）の一部
○赤羽根（アカバネ）の一部
○平たん沢（ヘイタンジャア）の一部
○森田（モリタ）の一部
○池の山（イケンヤマ）の一部
○榎木が沢（イノキガサア）の一部
○しったい（シッタイ）の一部
○矢割（ヤアリ）の一部

高処山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
高処山	タコウドオ	大沢の部参照
池の山	イケンヤマ	神津島村の部参照
鉄砲場	テッポオバ	神津島村の部参照

榎木が沢	イノキガサア	榎木が沢の部参照
赤羽根	アカバネ	大沢の部参照
しったい	シッタイ	大沢の部参照
平たん沢	ヘイタンジャア	神津島村の部参照
矢割	ヤアリ	神津島村の部参照
森田	モリタ	モリは「守り」「森」であろう、モリの地名の所には神社が祀られている例が多いと言う。タは「所」「場所」の意があるので、ここは守る場所と言うことになる、それらを考えていくと日向神社とこの地と関係があるのだろうか。

秩父山の部

○秩父（チチブ）の一部

○三浦（ミヨウオラ）の一部

○横山（ヨコヤマ）

○しったい（シッタイ）の一部

○七　観　音　（シチカンノン）
○平　　沢　（シラサア）

○赤　羽　根　（アカバネ）の一部
○金　　長　（キンナガ）の一部

秩　父　山　の　部

字名及び地名	島での呼び方
秩　父	チチブ
横　山	ヨコヤマ

字名及び地名考その他

かっては横山とよばれたと言う、この山の山頂に観世音菩薩の石仏を祀る小庵があり、横山観音堂と言われたがその後、観音堂の奥に秩父三十四ヶ所の札所寺の本尊仏の名を刻んだ石塔を並べて、秩父札所として古くから島の人達の信仰の対象とされている。その札所を設けた時から横山を、秩父山と改めたと言われる。

今の秩父山はかっては横山と呼ばれていたというがその一部が旧来のまま横山の地名で残されている。

三浦	ミヨウオラ
しったい	シッタイ
七観音	シチカンノン
赤羽根	アカバネ
平沢	シラサア

ここは山裾が横に広がる形なので、横山と言う地名になったもののように思える。

ここはその崖下に深く入り込んで、三方を高い岩壁に囲まれた三浦湾を見下ろすことができ、また三浦湾を抱える位置から三浦の地名になったものであろう、なを南面した傾斜地の畑は、気温が高くキヌサヤエンドウの栽培地でもある。

大沢の部参照

秩父山札所の参道中腹に、観音菩薩の石仏を祀る祠があり、七観音と呼ばれ島の人の信仰を集めている、この祠の所在が地名になったものであろう。

大沢の部参照

沢のあるシラなので「湿地」の意なのだろうか、シロであれば「灰色の土のある所」となり、また「丘陵

金長	キンナガ	上の平坦地」などが考えられる。 ここはシロの高台の平坦地と言うことではないか。 金長の部参照

鉄砲場の部

○鉄砲場（テッポウバ）の一部
○けたっ沢（ケタッチャア）の一部
○森田（モリタ）の一部
○池の山（イケンヤマ）の一部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
鉄砲場	テッポウバ	神津島村の部参照
森田	モリタ	高処山の部参照
けたっ沢	ケタッチャア	神津島村の部参照

池の山	イケンヤマ	神津島村の部参照

長根山の部

○長根（ナガネ）
○横瀬（ヨコセ）
○たらいが沢（タライガサア）の一部
○みとうじ（ミトオジ）
○てごなみ（テゴナミ）
○大川（オオカア）
○櫛が峯（クシガミネ）の一部

長根山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
長根	ナガネ	ナガは「長い」でありネは「峰」とか「台地の麓」または「岩礁の磯」などの意があるので、長い岩礁の磯がある地と言うことであろう。
てごなみ	テゴナミ	テゴはトガの転と考えれば「鋭い所」となり崩壊した崖地を表し、ナミはまたナメで「滑らかな地」とか「並んでいる形」を言う。

横瀬	ヨコセ	ここは直立した崖地のある地と言うことであろうか。 セは「瀬」で潮流の早い所と言うことである、横に潮流が当たると言うことではなく、岬に寄せる潮流の状を横と言うのではないか。 ここは潮流の寄せる岬のある地と言うことなのかも知れない。
大川	オオカア	オオは「大きい」オフは「負う」で山などを背負う地の意味がある、カアは「川」または「水の流れる」などの意がある、ここは雨が降ると周囲の山や谷間からその雨水が集まり奔流の形になると言う。 普段は水無しの枯れ沢だが、雨が降ると大きな川になると言う意味もあるように思える。 他の説でも形状から大きな川があってとしている。
たらいが沢	タライガサア	お観音の部参照

櫛が峯	クシガミネ	お観音の部参照
みとうじ	ミトウジ	ミは「水」の意である、トウジはタフシの転とすれば、タフは「潰れる」シは「磯または石」の状態を表すので、水によって崩壊した地となるのだろうか。

長浜の部

○長浜（ナガハマ）の一部
○犬山（オオヤマ）
○宮の平（ミヤンタイロ）
○たこう（タコオ）の一部
○犬里（オオリ）の一部
○もっかん（モッカン）
○めいし（メイシ）の一部
○水の沢（ミズンサア）の一部
○小浜（コバマ）
○牛沢（ウシジャア）の一部

長浜の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
長浜	ナガハマ	文字どうり「長い海浜」と言うことであろう、この地は長浜の御前と呼ばれたと言う伊豆三島大社の后神阿波命を祀る長浜神社があるので、長い砂浜のある地

もっかん	モッカン
大山	オオヤマ
めいし	メイシ
宮の平	ミヤンタイロ

と言うことが地名化したものと思われる。

難解な地名である、モツをモトとすれば「麓」とか「傍らとかほとり」などの意がある。カンはカツの転とすれば「崖地」のことであり、崖地の下のと言うことになるように思える。モツは「持ち」でカンを「神」とすれば、神持ちの地と言うことにはなるが、それではカンモツとしなければ、順序が逆うように思える。

オオはオフで「山などを背負う」と言う意であるので、ここは高い山の下の地と言うことであろう。山裾の傾斜地である。

錆崎の部参照

長浜海岸の上にある台地である、ミヤは長浜神社を

水の沢	ミズンサア	指すものと思われるので、ここは長浜神社の前の平らな台地と言うことではないかと思われる。
たこう	タコオ	錆崎の部参照
小浜	コバマ	鍛冶山の部参照
大里	オオリ	他の説では小さな可愛らしい浜だからとしているがコは「高い」の意があり、高い山または高い岩などのある浜と言うことか、小さい浜と言うことだろうか
牛沢	ウシジャア	鍛冶山の部参照

名組山の部

○名組（ナグミ）
○たのもし（タノモシ）
○根無山（ネナシヤマ）
○小穴（コアナ）
○大尻（オオジリ）
○横尾（ヨコオ）

○長　浜（ナガハマ）の一部

名　組　山　の　部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
名　組	ナグミ	ナグは「崖地」のことで、ミは「廻わる」とか「巡る」などの意がある、ここは神戸山などの山裾の崖地に囲まれた、大きな入り江のある地である。崖地を巡らした地と言うことであろうか。他の説ではナ（魚）が群れ遊んでいたためとしている
小　穴	コアナ	コは「小」または接頭語であるとしている、アナの付く地名は崖地に多いとも言い、また三方を丘陵に囲まれた地形をも意味しているとも言う、アナをハナの転とすれば、「崖・岬の先端の地」の意とする説や、アナは「洞穴」とする説もある。

たのもし	タノモシ
大尻	オオジリ
根無山	ネナシヤマ

ここは崖地のある地と言うことだろうか。

タノはタニまたはタナの転で「谷・棚」の意ではないか、またモシはホシで「崖・砂丘」でノシは「伸びる」などの意がある。
ここは棚状の段丘になっている地と言うことか。
頼母子講は数人の組合員の掛金を、くじによって一定の金額を順々に融通し合う無尽講のことであるが、これが地名の語源と関係があるのだろうか。

オオはオフまたはオウで「大きい」「山などを負う」などの意がある、シリは「端」で開けた沢地の端の地と言うことか。

ネは「峰」または「沼」「野」などの意がある、ナシは「山中の小さい平坦地」とか「〇〇になっている所」と言うこともある。
ここは小さい平坦地になっている山と言うことであろうか。

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
横尾	ヨコオ	ヨコは「横・横長」とか「端・はずれ」などの意がある、オまたはヲは「丘・高台」を表わす言葉であるので、この地は高台の横にある地と言うことなのであろうか。
長浜	ナガハマ	長浜の部参照
那智の部		
○那智（ナチ）		○やし峰（ヤシミネ）
○唯の池（タダヌケ）の一部		○立元（タチモト）
○沖の沢（オキンサア）の一部		○やまと（ヤマト）
○こいも（コイモ）		○中宮塚（ナカミヤッカア）
○大だめ（オオダメ）		○大山（オオヤマ）の一部
那智の部		

那智	ナチ
やし峰	ヤシミネ
唯の池	タダヌケ
立元	タチモト

ナは「山の中の小さい平地」を言う意があり、チは「数多く」でチをタチの略とすれば「台地の端の地」で、その端は崩壊地につながる例が多いとしている、ナタチであれば山中の台地でそれも、崩壊地のある端の地と言うことになる。
またこの地には那智観音と呼ばれている石仏を祀る小庵があるので、これが地名の語源とも言われている。かって島に熊野信仰が存在していたものだろうか。

ヤは「数が多い」シは「石」のことである、ミネは「峰」とか「尾根」など高くなっている所の意があるので、石の多い尾根の地と言うことなのだろうか。

鍛冶山の部参照

滝元（タキモト）とも言う。
タチは「崩壊地の端の台地」よりタキにこだわりを感じる、タキ・タギの地名語は（滾ぎる）タギルから来た滝とか急流の意味と、険阻な地の（嵩）タカの転で

沖の沢	オキンサア
やまと	ヤマト
こいも	コイモ

「台地・断崖」を表わすので、ここは断崖の下の地か滝の下の地で、タキモトと言う地名が適しているように思える。
なをモトは「下」と言うことである。

鍛冶山の部参照

ヤマトは「山の所」と言う意がある、この山は当然天上山のことでなければならない、またトは川口とか港・門などを指すので、天上山の入り口（昇り口）と言うことか。
それであればかってはこの山を経て山へ昇ったことになる。

コは「高い所」で、イモはウモで「土砂などで埋もれた川」とか「新らしく流れの変わった川」の意があるとされる。

ここは大正十五年に当時の陸軍工兵隊の協力で、ここに流れる小川の水を水源にして、村初めての簡易水道を引いた所で、それ以前は小川の流れによって土砂が堆積したり、流路が変わったことは十分考えられる。ここは水の流れのある高い所と言うことであろう。なを簡易水道に使われた鉄管は、大正十一年に第一次世界大戦の終結を記念して開かれた、平和博覧会の時使用したものを村が、払い下げを受けたと言う。

中宮塚

ナカミヤッカア

ここは宮塚山の中ほどと言うことだろうか、ミヤは「宮」「水」の意があり、カアは「水の流れ」のことである、しかしツカとすれば「高い地」となるので、水の流れる高い地と言うことか、また宮に流れる水のある地となるのだろうか、宮であれば長浜神社が考えれるが、水筋としてどうか。

宮塚山の地名については、利島・新島にもあるが、水に関した類型がなければならない、けれども何故三島に宮塚山があり読みも同じく「ミヤッカア」であるのかこれからの調査が必要となろう。

大だめ	オオダメ	オオとかオウは「大きい」「山などを負う」などの意があり、タメは「水溜の出来る湿地の所」と言うことである、またタムは「撓む」で曲がるの意がある。ここは水溜の出来る湿地の所と言うことか、また大きく迂回している地と言うことなのだろうか。
大山	オオヤマ	長浜の部参照

葱の場の部

○葱の場（ネギノバ）の一部
○和田上（アタド）
○塔の沢（トウノサア）の一部
○鷲谷沢（サギヤンサア）の一部
○おそめ（オソメ）の一部
○きらきく（キラキク）
○古道（フルミチ）の一部
○鷹の子（タカノコ）
○大沼（オオヌマ）の一部

葱の場の部

葱の場	ネギノバ	ネギをなぎの転と考えれば「崩壊地」となる、またノは「野」でバは「場とか所」となるので、崩壊したともとれる、しかし「場」と言う読み方からは、新しい感覚を覚える。他の説によれば葱の作付けに適した土地としている。
きらきく	キラキク	キラはキリの転で「限り」の意があり、崖地の端を表わすのではないか、キクはククと同じく「高い所」と言うことなので、ここは高い崖地の端の地と言うことであろうか。
和田土	アタド	アタはアタフタなど「荒れる」とか「急」また「落ちる」「間」などの意がある、ワタは「曲がる」の意味もあるので、ここは山と山の間で曲がっている所と言うことであろうか。
古道	フルミチ	鴎穴の部参照
塔の沢	トウノサア	鴎穴の部参照

鷹の子	タカノコ	タカは「高い地」の意味で、コはコシとすれば「崖」であろう、ここは高い崖地のある所となるように思えるので、タカノコシと言うことではないか。他の説ではタカのコウ（川）があったからとしているまた鷹の巣があったのでと言う説も、あまりうがち過ぎの感がある。
鷺谷沢	サギヤンサア	鴎穴の部参照
大沼	オオノマ	大沼の部参照
おそめ	オソメ	大沼の部参照

走る間の部

○走る間（ハシルマ）　○赤土（アカツチ）

○大たいろ（オオタイロ）の一部　○亀次郎（カメジロウ）の一部

○走る間河原（ハシルマガアラ）の一部　○花立（ハナタテ）

○中の沢（ナカンサア）

走る間の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
走る間	ハシルマ	ハシは崩壊した崖地の端しを言うのであろうか、マはママで「崖地とか崩壊地」を表わすので、崩壊地の端しの地と言うことになるのだろうか。しかしハシリと言う言葉には、崩壊地のスロープを落ドしてくる石塊の状を言うように思える。
赤土	アカツチ	アカは「高い地」とか「明るい・開く・上」などと言う意味があるが、ここは島で「アカネンバン」と言う粘土質の赤い土のある所と言うことだろうか。
大たいろ	オオタイロ	お観音の部参照
亀次郎	カメジロウ	お観音の部参照

○六本橋（ロッポンバシ）

走る間河原	ハシルマガアラ	穴の山の部参照
花立	ハナタテ	深い山の入り口辺りとか、遠い磯の降り口の手前の所に、手近の木の枝を折りとって差してあるのを見掛る、これは山や磯での無事息災を祈るのと、神えの畏れの証しとして捧げるものであろう。この花立ての入り口にもこのような花立て場があったので、それが地名化したものか。ハナは「端・鼻」の意で、タテはタツ・タチと同じく「小丘陵とか台地」の意があるが、ここは木の枝を差す花立て場のように思える。
中の沢	ナカンサア	ナカは「間の中」の意であり、山と山の間とか崖地と山の間にある沢と言うように思える。
六本橋	ロッポンバシ	島の北側になる地域は人の往来も少ない山林なので山道の手入れも届かず、天上山続きのこの辺りはもろ

い砂地の傾斜地で、折角の道筋も崩れ落ちるために、その斜面に僅かな道幅を削ってあった。それでも山肌を削れない所は立木を並べて木橋を架けてあったので、六本の立木の橋と言うことであろう。明治三二年の大火では全村が家屋を失ったので、ここは建築材搬出のため重要な道路であったが、人一人が歩む道幅であったと言う。

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
洞沢	ボラッチャア	神津島村の部参照

洞沢の部

○洞沢（ボラッチャア）の一部
○平たん沢（ヘイタンジャア）の一部
○神の木（カミノキ）の一部
○まじん沢（マジンジャア）
○深い道（フカイドオ）の一部
○赤羽根（アカバネ）の一部

まじん沢	マジンジャア	洞沢の奥にある地で、左右も突き当たりも切り立った崖地の深い沢である、何故ここをマジン沢と言ったのだろうか、島の言葉でマジンは妖怪などを表わすので、ここにはそのような伝承があるのだろうか、夕方になると蝙蝠（コウモリ）が飛び交うので、そのこともあるのかも知れない。マジンをマジの転と考えれば「谷や沢が交わる所」の意があるので、この沢と洞沢が交わる所と言うことであろうか。
平たん沢	ヘイタンジャア	神津島村の部参照
深い道	フカイドオ	神津島村の部参照
神の木	カミノキ	カミは「上の方」でキは「所」などの意がある、ここは上の方にある地と言うことか。他の説では信仰上の地名としているが、神の木は神の

赤羽根	アカバネ	宿る木とも取れるので、ここには信仰対象の樹木があったものだろうか。 大沢の部参照

宮塚山の部

○中宮塚（ナカミヤッカア）の一部
○つづき（ツヅキ）
○楠丸（クソマル）
○赤ん沢（アカンジャア）の一部
○桃山（モモヤマ）
○そつぼ（ソツボ）
○浮山（ウキヤマ）
○畑がたいろ（ハタキヤタイロ）の一部

宮塚山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
中宮塚	ナカミヤッカア	那智の部参照
桃山	モモヤマ	モモはママの転で「崖地」とか「崩壊地」のことであるので、ここは崩壊した山とか、崖地になっている

つづき　ツヅキ

そつぼ　ソツボ

楠丸　クソマル

山と言うことか。

ツツは「山ひだに包まれた地」と言う意があり、またキは「場とか所」を表わすので、ここは崖地に挟まれたとか、包まれた地と言うことになるのか。他の説によれば山続きを指すのであろうとしている。

ソは「磯」「裾」などの意で、ツボは「壷」で□元がつぼむか、またはツバで「潰れる」の意味になり、崖地のことを言うので、ここは山裾の崖地か、または山裾の壷状の地と言うことかも知れない。

クスはコシと同じく「崩壊した地」などのクズレの意であろう、マルについては「曲がる・曲がった所」と言うことなので、崩壊して曲がった所と言うことだろうか。

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
浮山	ウキヤマ	ウキはフキまたはフケでいずれも「湿地」のことであるが、ここは地形的に湿地とは考えられない、宮塚山から裾を引くこの地は北側と西側の両面は、急傾斜で落ち込んでいるので、ここのウキはハキの転で「剥ぐ」の崩壊地となるのではないか。浮石のある山と言う説もあるがどうか。
赤の沢	アカンジャア	穴の山の部参照
畑がたいろ	ハタキヤタイロ	穴の山の部参照
三浦の部		
○三浦（ミョオラ）の一部		
○猿が崎（サルガサキ）		
三浦の部		
○しったい（シッタイ）		
○平沢（シラサア）の一部		

三浦	ミョウラ	秩父山の部参照
しったい	シッタイ	大沢の部参照
狼が崎	サルガサキ	サルはザルとかザレ、またはザリ・サラなど「崩れ地・崖地」の意がある。ここは崩れ地とか崖地になっている岬であろうか。
平沢	シラサア	秩父山の部参照

向山の部

○向山（ムカヤマ）

○こび道（コビドウ）の一部

○池の窪（イケノクボ）の一部

○焼山（ヤキヤマ）の一部

○鍛冶屋沢（カジヤンサア）の一部

○半坂（ハンザカ）の一部

向山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
向山	ムカヤマ	ムカは「向かい」とか「剥ぐ」の意で、対面しているとか、または崖地を言う場合があるが、ここは村落の向い側にある山と言うことのように思える。
焼山	ヤキヤマ	ヤキは「焼き畑」の意があるので、焼き畑の山と言うことだろうか、そうであれば昔の焼き畑農業の名残りの地名となる。 山火事が地名の語源であればヤケヤマとなるように思われる。
こび道	コビドウ	大島の方言で傾斜していることを「コビラガカッテル」と言うとある、コは「突き出した高い所」を言いコヒがコフなら「拳状に突き出した地形」となり、ドウがトノ・タナで「段丘か小高い所」となるので、ここは突き出した高い所となる。 かって公簿に瘤道と書かれていたのを記憶している。

鍛冶屋沢	カジヤンサア	神津島村の部参照
池の窪	イケノクボ	イケは「土砂で埋め立てられた所」とか「自然の水溜り」など湿地の意がある、クボは「低地」のことでここは雨水で自然に埋め立てられた所と言うのではないかと思われる。
半坂	ハンザカ	ハンはハニの転と考えられ、もしそうであれば「赤土の出る地」となる、サカは「傾斜地とか坂」のことを言うのでここは赤土の出る、または粘土質の傾斜している地と言うことか。

面房の部

○面房（メンボウ）の一部
○焼山（ヤキヤマ）の一部
○半坂（ハンザカ）の一部
○塔の沢（トウノサア）の一部
○横道（ヨコミチ）
○古道（フルミチ）
○葱の場（ネギノバ）の一部
○田の沢（タノサア）の一部

○ありま（アリマ）の一部
○げっぷく（ゲップク）の一部
○おみき沢（オミキジャア）
○治平沢（ジセイジャア）の一部
○大沼（オオノマ）の一部

面房の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
面房	メンボウ	鴎穴の部参照
横道	ヨコミチ	ここは文字どうり傾斜のある崖地に取り付けられている道路のことであろう。村落の灯がまたたく夜景の美しい所でもある。
焼山	ヤキヤマ	向山の部参照
古道	フルミチ	鴎穴の部参照
半坂	ハンザカ	向山の部参照

葱の場	ネギノバ
塔の沢	トウノサア
田の沢	タノサア
ありま	アリマ
治平沢	ジセイジャア
げっぷく	ゲップク

葱の場の部参照

鴎穴の部参照

他の説によれば田を耕すのに用いた沢だからとしている。

ここは島で唯一の水稲の栽培地であるので、田を作る沢の地名が付いたものであろう。

鴎穴の部参照

鴎穴の部参照

地名辞典を開いてもゲップクに見合う地名を探すことは難かしい、公簿で「月腹とか月服」と書かれているのを見たことがある。

ゲツをツキと読めばツは「小高い」キは「所」となる

大沼	オオノマ	プクをフクとすれば「傾斜地」となり、ハラであれば「原」となるので、ここは緩い傾斜のある地と言うことだろうか。
おみき沢	オミキジャア	大沼の部参照 樅（モミ）の木の古名を、オミノキと呼ぶので、ここに樅の木が生えていたものだろうか、オは接頭語で、ミは「水」のことキは「場所」を言うので、ここは水のある沢と言うことなのか。

山川の部

○山川（ヤマッカア）
○深い道川（フカイドオ）の一部
○こび道（コビドオ）の一部
○池の窪（イケノクボ）の一部
○柑が沢（コウジガサア）の一部

山川の部

○宮原（ミヤッパラ）の一部
○秩父（チチブ）の一部
○神の木（カミノキ）の一部
○焼山（ヤキヤマ）の一部
○金長（キンナガ）の一部

山川	ヤマッカア	ヤマツカなのかヤマカワなのだろうか、ツカであれば「小高い所」とか「台地」などの意がある。カワであれば少なくとも水の流れる所、水溜りや湿地または池などが存在しなければならない、ここの語意からは川または池のある山と言うように思われるのであるがどうか。
宮原	ミヤッパラ	神津島村の部参照
深い道	フカイドオ	神津島村の部参照
秩父	チチブ	秩父山の部参照
こび道	コビドオ	向山の部参照
神の木	カミノキ	洞沢の部参照

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
池の窪	イケノクボ	向山の部参照
焼山	ヤキヤマ	向山の部参照
柑が沢	コウジガサア	金長の部参照
焼山の部		
焼山の部		
○焼山の部		
○焼山（ヤキヤマ）の一部		
○掘地（ホッチ）		
○柑が沢（コウジガサア）の一部		
○ぐみ山（グミヤマ）の一部		
○大沼（オオノマ）の一部		
○横吹（ヨコフキ）の一部		
○田の沢（タノサア）の一部		
○げっぷく（ゲップク）の一部		
○金長（キンナガ）の一部		
焼山	ヤキヤマ	向山の部参照

横吹	ヨコフキ	大沼の部参照
掘地	ホッチ	文字を見るかぎり地を掘削して出来た様に思えるがホは「秀でる」で高い所とか目立つ所と言う意があるホッは「ほつれ」で崩壊した地になり、チは「数が多い」と言うことになる。しかしここはホキの「崖地」のことで、崩壊した土地を畑に仕上げた所と言う様に思える。
田の沢	タノサア	面房の部参照
柑が沢	コウジガサア	山川の部参照
げっぷく	ゲップク	面房の部参照
ぐみ山	グミヤマ	金長の部参照

金長	キンナガ
大沼	オオノマ

金長の部参照

大沼の部参照

天上山の部

○天上山（テンジョウサン）

千代川（センダイガア）

不動池（フドウイケ）

砂漠（サバク）

不入沢（ハインナイガサア）

天上山の部

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
天上山	テンジョウサン	天井山・天城山と記した文献も見られる、テは「突きだした所」テンは「高い」と言うことと尊いと言う意が多分に含まれているように思える。 この山は古来から、喪に服している者はその期間が終るまで、月の障りのある女子はそれが終るまで、山えの登山を固く禁じ、それを冒す時は漁業は不漁が続く

とか、農業では天候不順でその年の収穫に大きな影響があるとされ、近年までかたくなに守られていた、経過があるので、天上山の山体そのものを神格としていたものではなかろうか。

砂漠	サバク
千代川	センダイガア
不入沢	ハインナイガサア

一番大きな火口跡であろう、天上山噴火後一一五〇年経た今も大きな窪地になっている所である。所々に草が生えているが以前は、純白の砂原であったので、砂漠と言う地名が付いたものであろう。

旧火口跡の窪地に雨水が溜まって出来た池である、センはセムの転で「迫る」ダイはタイで「狭い」と言う意があるので、ここは狭い平の池か、丘になどに迫られた池と言うことであろうか、そのほか信仰上の地名化とも考えられる。

この地は神々がここに集まり島焼き出しの詮議をし

した地、また伊豆の島々に水の分配をするため神々が集められた所とされ、神津島の名の起源の地とされている所でもある。

ここは大きな窪地になっているので火口跡であろう。昔島の婦人が頭の被り物を沢の中え風に飛ばされた、慌てて拾いに沢え入るとそのまま姿を消して仕舞ったと言う伝承の残る沢であるので、決して立ち入ってはならない地とされていた。

以前小学校の遠足はフドウサンに登山することであった、その頃も天上山と呼ばれていた筈なので、二様の呼び方があったのであろう、

山頂の池の中の築山に不動尊を祀る祠があるので、この池を不動池と呼んだものと思われる。

不動尊は山岳信仰者の本尊であるので、過去に修験者や信仰者によって祀られたものであろうか。

不動池

フドウイケ

神津島村の磯の名

赤根の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
赤根	アカネ	アカはハカの転で、崖地になっている所の岩根と言うことであろうか。
ざおり	ザオリ	ザオリは波が岩礁に打当たりながら、押し寄せてくる様を表わしているように思える。波頭が崩れ落ちて押し寄せて来ることを、波がオルと言うので岩礁を波が打越して来るので、それでザオリと呼ぶのではないか。
岡じだ	オカジダ	オカは海に対して陸地側と言う意と「高い所」を表わしている、ジダはシタまたはシダで何れも「垂れる」こ

沖じだ	オキジダ
人浜	ヒトリバマ
めぐり	メグリ
大黒根	オオグロネ

とで、何れも崖地とか急傾斜地を表わすので、ここは急傾斜地の下にある浜、またはそこにある岩礁と言うことのように思える。

岡じだと同じような意味であろう、ここは岡じだの沖合の岩根と言うことなのだろうか。

ヒは「水路」のことであり、トリは「崖地」を意味したものだが、トルとすれば「通る」になる。ここは崖地の舟の水路のある所なのだろうか、もし水路であればミオと言うように思えるのだがどうか。

メグリは「廻わる」で大回りをする意がある、この磯へ渡渉するのに大回りしなければと言うことか。

黒い岩礁（根）と言うことだろうか、クロは「畔」で小高い所の意があり、この磯の中で大きい岩根と言うことのように考えられる。

またオオは黒根または小黒根があればそれに対する比較

	するすぎぼ	スルスギボ
大船の舵		オオフネノカジ
水が尻		ミズガシリ
久八根		キュウハチネ
赤崎		アカッサキ

してのオオ（大）であろう。

スルスとかスルカは「州所」であるので、浅瀬の州と言うことであろうか、ギボは橋などの欄干に付く擬宝珠のことなので、浅瀬に突き出している拳状の岩を指すものだろう。

具体的な事件があったためか、地形がそのようになっているのだろうか。

湧き水とか川の流れの流末を表わすので、ここは水の流れのある磯と言うことか。

人の名の様に思える。

アカは「上」アケであれば「開」ハカの転で「崩壊した崖地」を言う場合がある、またサキを崎とすれば崎は

恩馳向	オッパシムキ	陸地から突き出した岬を言うので、海中で孤立しているこの岩礁は崎には当てはまらない。ここはハカのサキで崩壊した崖地の先の岩礁と言うことのように思える。 この正面に恩馳島を見ることができるから、この名が付いたものであろう。
文七	ブンシチ	人名からかか。

名組の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
平根	ヒラネ	シラネとも言う、平らと言うより低い岩礁である。
浜津ヶ沢	ハマズカサア	ツカはスカで「州処」で砂地の所の意がある。サワについては「谷」と言うことであるが、ここは海岸を指すものと思われる、ハマは浜の意で砂地の海岸

大名瀬	オオナグミ	の浜と言うことであろう。 ナグは和やかな海面（凪ぎ）とか、渚の転である、ミは廻ると言う意なので入り込むとか、入り組むで、オオはオフで山などを背負うとなる、ここは山を負う入り込んだ海岸となろうか。
角柱	カドバシラ	カドは「角とか門」またカトは「崖または自然堤防」を言う、またハシラが付くので入り江の角の柱状の岩根を言うのではないか。
小海口	コオミグチ	オは「海面・水面」を言いミは「水際・海際」を意味し、クチも「入り口」を言うので、ここは海岸の水際となるのか、コはコゴで「険しいとか岩石地」の意もあるので、岩石地の海の際の所となろうか。

大立	オオダチ	オオはオフで「山を背負う」と言う意で、タチは「小高い所とか台地」を言う。 ここは山近い小高いまたは台地の磯と言うことになる。
万根	マンネ	マンは「円」で円形の岩礁と言うことか。
畳ヶ鼻	タタミガハナ	タタはタチの転で「台地・水を湛える・膨れる」などの意がある、ミは「水」のことで、ハナは「岬」なので台地状の岬と言うことであろう。
横根	ヨコネ	ヨコは「横」であるので、ここは横長の岩根と言うことであろう。
牛が下	ウシガシタ	ウシはウチの転で「内の方・内側」を言い、またシであれば「石・磯」の意になり、シタは「垂れる」の崖地急傾斜地を言う。 ここは内側に入り込んだ石の磯または崖地の所と言うことのように思える。 特に野牛との関係がある所とは考えられない。

磯・岩根の名	呼び方	地名その他
浦根	ウランネ	ウラは入り江の内湾を言うだけでなく、潮流の末（ウラ）のことを言い、潮流が回り込む岬や海に突き出した所の地名に当てはめられる。潮末（シオウラ）の岩根と言うことであろう、この浦根の地名はこの付近の岩礁を含めた地域一帯を指すが、本来はこの沖側にある離れ根を言うのではないか。
長浜作根	ナガハマザクネ	サクは「裂く・谷」の意がある、島の言葉でザクは「複雑に裂けている」状態を言うので、恐らく水面下の岩礁は大きく裂けているか、谷状のはえになっているのではないかと思われる。
竹山が尻	タケヤマガ	島で真竹の生える所は数カ所に過ぎない、ここはその

	シリ	うちの一ヶ所であるので、真竹が生えている山と言うことになり、シリは「端し」の意になるので、ここは真竹の生える地の端しと言うことになるのか。
茅っ株	カヤッカブ	茅の生えている所と言うことか。
背負い掛場	ショイカケバ	まだ道路の整備が進まない頃男性は背負い子で、女性は頭にアゲモンと言う幅広の布を、クルクル巻いて載せ薪や畑の収穫物を運搬していた。阻害な道路を重い物を運ぶので、適当な距離で休憩するのが常で、背負い子や荷物を降ろして休憩する所がこのショイカケバであった。
三四郎	サンシロオ	サンは「崩れ地」のサルまたはサラではないだろうか、シロは「白い土のある所」でここは白土の崩れ地と言うことのように思われる。

磯・岩根の名	呼び方	地名その他
水の押出し	ミズノオッタシ	長浜神社の境内から流れてくる小川が、海岸に流れ込んでいる所である。
長浜	ナガハマ	文字どうり長い海浜と言うことであろう。他の説でも長い浜としている。
大石が沢	オオイシガサア	長浜海岸の中ほどで大きな石が目立つ所である、しかし何故沢（サア）なのであろう。
打っとうし	ブットウシ	ぶっとうすは島の言葉で、打ち抜くまたは貫き通すを強く言う意である。これは長浜海岸の眼鏡岩のことで、大きな岩の根本に二つの穴が並んでいるので、この穴が打ち通されていることを表わすもの。

滅法山	メッポウヤマ	滅法は「ひどく道理にはずれている」ことを表わすがメツはメで「狭い所」でホウは「突き出した所・先端」または「高い所」などの意がある。ここは突き出した岬の高い所と言うことなのか、しかしこれでは十分説明出来ない、難解な地名である。
小浜	コバマ	コは「高い所」と言うことであるので、ここは高い岩のある浜であるのか、この高い岩と言うのは滅法山を言うのだろうか。
袖が浜	ソデガハマ	ソはソギの転であるとしたら「削ぎ」で崖地を言う、テはトの転で「鋭い」の意になり「突き出した所」となる、ここは突き出した崖地のある浜と言うことか。

めいしの部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
十文字	ジュウモンジ	ここの地名の十文字は、二七とか二八などの様に岩場

め い し	メイシ	などに自然に刻まれた十の字があるのだろうか、小さな入り江をみてもそれらしきものは見当たらない、この岩場のどこかに十の文字があるのか。
彦造じい	ヒコドウジ	メは「狭い所」のことでイシは「石の多い磯」を言うので。ここは石の多い磯と言うことになる。 ヒコは「低い」またドウは「入り口とか門」などの意ある、なおドウは「洞窟」とも言うので、洞穴の入り口の所とでも言うのか。
めいしのは なれ	メイシノハ ナレ	めいしの磯で陸地から離れている岩根と言うことであろうか。
黒　崎	クロッサキ	クロは「畔または小高い所」とか「曲がった所」などの意があるので、ここは小高い崎とか鼻と言うことであろう。

鵜のくそ	ウノクソ	鳥糞の多い岩場と言うことだろうか。
長　池	ナガイケ	池の名の付く磯はかなり多いが、干潮になれば部分的に干上がる程度で、完全に孤立した池ではない、ここは細く長く切れ込んでいる小さな入り江である。
大　根	オオネ	めいしで比較的大きい岩礁を言う。
広目池	ヒロメイケ	ヒロメは昆布の古名であるが、茶色で幅広の海草のことで島では昔から食用にしてきたものである、この広目が生えていた磯と言うことだろうか。
背負崎	シヨオイザキ	セオウであれば「背後に山などを控えた所」セは「瀬とか狭い」と言うことで、シは「石または磯」を言う。ここは山を負う磯とか瀬で水路のある岬と言うことか。
牛　根	ウシネ	牛が寝ている形から名付けられたものか。
金　敷	カナシキ	上の部分が平滑なのでその形からの名と思える。

長八根	チョウハチネ	人名からだろうか、
〃	ママ	ママは急傾斜の崖地を言うので、そのママであろう。

錆崎（寒崎）の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
高横根	タカヨコネ	ここは文字通りの高くまた横に広がる岩礁と言うことであろう。
青池	アオイケ	アオは「湿地とか水辺・海辺」を表わす言葉であるがここは海水の色を意味しているのではないか、またイケは池と同義語であるが、ここは小さな入り江である。
はなれ	ハナレ	ここは渡渉できるが、離れているからであろう、青池の口元に当たる。

錆崎	サブサケ	サブは「荒ぶ」（スサブ）の意で、波浪や強風が打ちつける様を言うのではないかと思われる。
はな	ハナ	突き出している形を言う様に思われる。
ふかい	フカイ	小さな湾であるが水深が深いからだろうか。
おおちちろ	オオチチロ	チチロはツシロの転で魚を採る所であると言う、他にもチチロの地名があるので、オオはそれと区別するためのものと考えられる。
湯池	ユイケ	昭和の初め頃までここに温泉が湧き出していたので、コンクリートの湯槽を作ってあった、それが地名化したものであろうか、今はコンクリートの湯槽のみが残ってその上に村営の神津温泉ができている。
やせ	ヤセ	ヤセは「痩せ」で崩壊地を言う、また傾斜の強い崖地の磯を言うので、ヤセの地名は多い、しかしここは大きな転石の磯になっている。

地獄	ヂゴク
戸棚	トダナ
やせ	ヤセ
沢尻	サアジリ

チは「千」で数多くの意、またゴクはコグで「抜ける」とか欠ける」で崩壊を表わす、またコゴは「凝り」で、険しいことを意味している。ここはチ・コゴとかチ・コグで険しい多くの岩場のある磯と言うことであろうか。

トダナと言う磯の名は多い、階段状とか台形になっているもの、または棚状になっているものを言う。

ヤセは「痩せ」であるが、多くは転石の磯を言う場合が多い、ヤは「岩」でセは「瀬」であるように思える。

サワシリは「谷川の流末」を表わしているので、ここは川水の流末のと言うことであろう。

亀の甲	カメンコオ	亀の甲羅に似た岩があるからと言う。

かたふたの部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
沖白根 岡白根	オキジラネ オカジラネ	オキは沖側のことで、オカは渚側のことである、シラは「白」でヒラは「平」の意であるが、シロは「代」で場所を表わすので沖側にあるとか、岡側にある岩礁と言うものだろう。
鮫根	サメネ	鮫と関係があるものだろうか。
かたふた	カタフタ	カタは「入り江とか干潟それに台地の端または肩」などの意がある、フタは「端の方」と言うことなので、ここは海際の台地の端とか、台地の肩と言うことであるのだろうか。
茶釜	チャガマ	ここには自然の凹みがあるので茶釜と言うのか。

蝙蝠穴	コウモリヤアナ
砂原	サアラ
おんねの鼻	オンネノハナ
神木島	カンキ

こうもりが棲んでいる岩穴と言うことであろう、今は道路に削られてこうもりはいなくなった。またヤアナは「窟穴」と言うことであろうか。

サワであれば「谷や川筋」または「湿地」を言う、ラは「場所」となるので川筋の地とか湿地の場所となる、滝川や付近の山や沢からの湧き水が、この浜え流れ込んでいたことを考えると、川筋の地ともなる。

御根の鼻であれば御は尊敬の意であろう、またその対象は物忌奈命神社なのか神木（カンキ）に祀る竜神社なのか、漁船が海で妖しい物に取り付かれてもこの鼻まで漕ぎ寄せると、妖しい物は離れて行ったと言う。

神寄であるとも聞く、神が島を開くため船を寄せられここから上陸された所と言われている。

神埼（カムキ）であれば「神の鎮座する地の前の島」と

言うことになる、この小島には竜神が祀られて、漁業の守護神として尊敬されている。
ここは明治四十三年に海老生洲の掘削工事を小松川宗吉に請負わせ、翌年の七月完成し海老網漁業に貢献した。

地内釜	ヂナイカマ
まない	マナイ
長沢	ナガサア

地内は土地の一定区域を指すもので、前浜の区域内と言うことで、カマは「崖地」の意とする説と、「穴とか奥深い」とする説がある。
ここは凹みのある険しい岩礁を言うものであるのか。

今は神津島港の防波堤に組み込まれて仕舞った、以前はここと地内釜との間が水路になっていて、漁船の出入りの口元であった。

ここは駐車場に埋め立てられ以前の半分程になったが転石の磯である、これは天上山からの雨水が神津沢を伝わりながら運んできた転石であろう。
長沢の名は神津沢の意があるのではないか。

森浜	モオリ
つまり	ツマリ
むつ根	ムツウネ
ちちろ	チチロ

モリという地名のある所には、神社がある場合が多いと言う、またモリには「守るもの」と言う意があり、このモリは海岸ママ上の保安林のことのように思えるのでモオリと言う地名は保安林の下の浜と言うことのように思われる。

ツマは「詰まる所」で端とか隅を言うが、一方ツマはヒラの同義語の古語で、「急坂・崖」とか「切り立った崖」とも言われる。
ここは浜の隅で切り立っている崖地を言うことか。
他の説ではツは「津」で船着き場を言うとある。

小型のムツが釣れたのであろうか、ムツには「陸地」の意があるが陸地とは特に関係はないように思える。

チチロはツシロの転で、「魚を採る所」の意がある。
ツマリのヤセから突き出しているので魚が良く採れた。

あきどめの部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
しっちゃん	シッチャン	シッチャンガルは島の言葉で「ぶらさがる」を言う、足場が悪いのでぶらさがって渡ったものか。
長五郎	チョウゴロ	人名からのものと思われる。
がん首	ガンクビ	煙管（キセル）の煙草を詰める部分で、L状になっているがそのような地形や、岩礁があるのか。
こうじり	コオジリ	コウはカフの転で「傾く」であり、シリは「後・端・末」などの意がある、ここは傾斜した岩の端と言うのか
引廻し	シンマアシ	ヒキマアスまたはシンマアスは島の言葉で、引き回すとか強く回すと言う強い語意がある。前浜湾を流れる潮流がこの岬を激しく巡り洗う状態を言うのではなかろうか。

池の尻	イケノシリ	イケは島の言葉で小さな入り江を言う、ここはその入り江のシリで、入り江の渚側と言うことか。
みこ	ミコ	ミコであれば「美篭」である、ミコをムコの転とすれば「剥ぐ」で崩壊地などを指すことになる、ミコであれば篭状の磯か、ムコであれば崩壊地のある磯になる。
おごさ池	オゴサイケ	ゴサはコシの転で「崖地」のことになるので、ここは崖地のある小さい入り江と言うことか。
赤羽根	アカバネ	アカはハカの転で「崩壊した地」で、ハネはハニで「粘土質の土地」を意味するが、ここはハの「端し」で崩壊地の端しの磯ともとれる。
鮫根	サメネ	かたふたにも鮫根がある、鮫との関係をしめしたものと思われる、銛（ヤス）で魚を突いて居る時、鮫に付きまとわれ結局食い付かれたと、首筋の傷跡を見せてくれ

じびら	ジビラ	た年寄りを思い出す。 ジはシで「磯・石」で、ビラはヒラで「坂・傾斜地」を言うので、傾斜地の磯なのか、
ちちみこ	チチミコ	チチはチカの転で「高い所」ミコはムコの転で「剥ぐ」であるので、崩壊地とか崖地を指すように思える。
じゃんぎり	ジャンギリ	ジャンギリは「散切り」か、不揃いの岩場を言うのかジャンカは島の言葉で「表面が粗い」ことを意味するので岩場の状態を言うように思われる。
かもめあな	カゴメ	カゴは「崖地・崩壊地」を言うが、島では鴎のことをカゴメと言うので、鴎の巣穴のある磯と言うことか。
しんた	シンタ	シは「磯・石」でタは「処」である、ここは石のある磯と言うことだろうか。
おれったち	オレッタチ	降り立つ所の意であろう、崖地を下った所の磯の意、

しよくどう	ショウドオ	シヨはシホで「萎む」陸側が狭まっている意である、クドはクドレで「崩壊地とか崖地」なので、狭ばまった崩壊地の磯と言うのか。
松三郎	マツサブロ	マツは「捲く・曲がる」などの意があり、サブは「荒れる」であるので、捲くとか曲がるを障害のある所とすれば、波の荒い危険な磯となるように思われる。
みのわ	ミノワ	ミノは「水の」と言う意がある、ワは「曲がる流れ」であるので、ここは潮流が当たって曲がって流れると言うように思われる。
いすけぎぼ	イスケギボ	イスケは人名ではないか、イスは「石・磯」で、ケはキの転で「際」である、ギボは擬宝珠で磯際の擬宝珠ようの岩のある所なのか。
大根	オオネ	比較的に大きい岩根と言うことであろう。

いるか池	イルカイケ	海豚（イルカ）と何か関係がある磯なのか。
しんた	シンタ	あきどめにはシンタが二ヶ所あるのだろうか、一二四頁を参照
こえご	コエゴ	エゴはイケと同じ様に入り江を言う島の言葉である、コが「小さい」と言う意なら、小さい入り江と言うことになる。
馬の背	ウマノセ	馬の鞍部状の瀬と言うことか、ウマはウバの転で「崖地」またウマジであれば「狭い谷」となるが、ここは馬の鞍の形をした岩となるように思われる。
浅根	アサネ	この辺の海底は浅く帯状に広がる起伏の多い岩礁地帯で、普段露出している岩も満潮になると水没して仕舞うので、浅い根となったのだろう。
万根	マンネ	マンは「丸」で円形の岩と言うことであろう、ここは島でも一番潮流の激しい所である。

おご根	オゴネエ	オゴは「峰越しとか尾根越し」の意があるので、崖地と言うことであろう、ネエと言う言葉についてはどのように考えるべきだろうか、ネは「根とか峰または沼・野」などが挙げられる、エについては「入り江・水のある所」とも言う、これらから崖地の入り江と考えるのが、適当なのだろうか。
つるっこ	ツルッコ	ツルは「連れ」と関係し長く連なった意であるが、ここは崖地が連なっている磯と言うことか、コはコゴとすれば「凝る」で険しいと言うことになるがどうか。
こいのこせ	コイノコセ	コイは「高い所」ノはノマで「崖地」なので高い崖地と言うことになる、コセはコソネで「岩石地の磯」を言うので、ここは高い崖地の岩の多い磯となるのか。
たっぱしら	タッパシラ	タツは「台形の地」である、ハシラは「直立する」の意である、ここは直立した崖地の台地の磯であろう。

二七	ニジュウシチ	ノマネエノエゴの入り口の海蝕崖に二七と読める亀裂があるので、ニシチとかニジュウシチとよばれる。
のまねえのえご	ノマネエノエゴ	ノマはママと同じく「崖地・崩壊地」で、エゴは「江口」の川とか海の入り江のことである。ここは島の創出期の噴火活動の時の噴火口裂で、約七万年前にできたものとされている、明治の中期にこの奥深い入り江の中に毎日魚群が入り込み、くじ引きで漁を続けるほどであったので、千両池と呼ばれたと言う。また文久の年の頃、島が飢饉で困っていた時恩馳島に漂着した船が、米を積んでいたのでこの入り江に引き込み島人の命を救ったと言う入り江である。
あきどめ	アキドメ	アキはハキの転で「崖地」トメはトベの「崖地」のことで、崖地が続く所と言うことであろう。あきどめと言う地名は島の南西部に続く崖地の磯の総称で、これは崖地が連続する磯を言うものであろう。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
一の首	イチノクビ	イチをイツの転とすれば「蔽」で険しい地となる、クは「崩れ」ヒは「水路」のことになるので、ここは険しい崩れ地のことであろう、水路はおごねえのえごの入り口のことか。
めんぐり	メングリ	メグリであれば「回り込む」ことになるが、島の言葉でメングリは「小さい穴」メンゴリであれば「少ない」ことである、ここは小さい穴がある所と言うことか。
ようぞう	ヨウゾオ	人名だろうか。
二八	ニハチ	ノマネエノエゴと外海を区切る海蝕崖に、二八と言う字が刻まれているので、二七と同じように二八と呼ぶ。
ぜんしん	ゼンシン	ゼンはセムで「迫る」シンはシで「磯」である、両側

平七ちちろ	ヘイシチチロ
弥吉ちちろ	ヤキチチロ
大吹	オオフキ
こえご	コエゴ
あしたばな	アシタバナ

から崖地が迫る磯と言うことか。

チチロはツシロで「魚を採る所」である、ここは特定の人が何時もそこで釣りをしていたから、その人の名が付いたのか。

平七チチロと同じように特定の人がいつもそこで釣りをしていたからか、またその人以外には行けない磯であったのかも知れない。

オオはオフで「負う」フキはハキの転で「崖地」のことで、崖地を背負う磯と言うことであろう。

エゴは「入り江」のことで、ここは小さい入り江と言うことだろうか。

アシはハシで「端」である、タは「処」ハナは「端」であるので、ここは急傾斜地の端の磯になる。あしたばであればナはどう言う意味なのだろうか。

なめら	ナメラ	ナメラは「滑らかな地形」とか「並んだ地形」を言い緩い傾斜地や、石や岩礁が磯で並んでいる状態を言うのであろうか。
長ん根	ナガンネ	横に細長い岩礁を言うものであろう。
きらきく	キラキク	キラはキリの転で〔限りまたは端し〕で、キクはククで「高い所」を言うので、ここは高い崖の端の地なのか
かす池	カスイケ	干潮になると干上がる水溜りに、椿油を搾った滓を溶かしこむと、隠れているメジナなどが浮き上がって来るので、それを捕えたものでそれのできる干潟のこと。
二番	ニバン	二番目と言うことだろうか、そうであれば一番がある筈である。
ななしろ	ナナシロ	シロは海の深さを表わす単位である、一尋（シロ）は

もっく池	モックイケ	約一・五米で、ここは海の深さを言うのだろうか。
伝兵エ	デンベエ	モックは海草の藻のことである、海草の生えている磯の入り江のことか。
ただ島	タダシマ	どう見ても人名としか考えられない、キラキクの屹立した絶壁の下で、釣り場として知られているが、不慣れな者には渡ることは困難である。
まつわのあだ	マツワノアダ	タタは「台地」のことであるが、ここはタルで「垂れ」のように思える、シマは島の意になるがここは基部が陸続きで急傾斜の崖地の下になる。 マツは「捲く・曲がる」ワは輪で「湾曲した地点」を言う、ワダ・アダは入り江とか湾のことなので、回り込んだ湾と言うのか。
平根	ヒラネ	平ったい岩と言うことか。

さいま	サイマ	サイはサキの転で「裂けた谷間」マは「場所」と言う意味があるので、険しい谷間の磯となるのか。
やあなぐち	ヤアナグチ	ヤアナは島の言葉で「窟穴とか洞穴」のことで、ここは洞窟の口元の磯になるのか。
又エ門泣き	マタエモナキ	特定の人名である、ここえ海苔採りにきたが前にも後にも行けなくなった険しい所であると言う。
ひとまたぎ	ヒトマタギ	大股なら渡ることの出来る磯のことか。
太郎兵エ	タロベエ	タロはタルの転と考えれば「垂れる」で海蝕崖が垂直になっている状態で、ベエをヘイとすれば「端し」となる、ここは海蝕崖の端を言うのか。
長ん根	ナガンネ	ナガネとかナガンネの磯名はかなり多い、総体的に長いと見られる岩礁の名である。

東作	トウサク	トウはタフの転で「崩壊した海岸」を言う、サクには「裂く・削く」の意があるので、ここは崩壊した谷状の海岸または磯となるのか。
そうぼ根	ソウボネ	ソウはソネであるとしたら「磯根・石根」を言う、またホは「秀」で「突き出している」ことを意味しているので、ここは張り出している磯と言うのか。
竜七	リュウシチ	人名に由来する地名か。
小あま根	コアマネ	アマは「高所・崖地・急斜面」と言うような意味があるので、ここは急な斜面の岩礁とでも言うのか。
大あま根	オオアマネ	コアマネと同じように急斜面のある、またコアマネより大きい岩礁と言うことか。
ぶっこし	ブッコシ	ブッコスは打ち越すの島の言葉である、波が岩を乗りこえて来る状を言うので、何時も波がかぶせる低い岩と言うことであろうか。

平あま根	ヒラアマネ	ここは大・小のアマ根と対の岩礁と言うことではないか、特に傾斜の強い意はなく高い岩ではないか。
の　ま	ノマ	ノマはママの転で「崖地」を意味するが、この地名は島の南西の海岸を総称するもので、崖地の続く磯と言うことであろう。

せんちちろの部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
孫平根	マゴヘイネ	人名に関係があるのか。
かど	カド	カドは角で、曲がる所のことか。
むかいそうご根	ムカイソウゴネ	ムカイは「向かい」なのか。ムカをムケの転とすれば「剥ぐ」で崖地を言い、イソウは「岩石の露出した所」

つがる	ツガル
おんちちろ	オンチチロ
ろくぞう	ロクゾオ
東の六ぞう	ヒガシノロクゾオ
うなぎ根	ウナギネ

となり、ネは「根」で岩を言うものであろう。ここは露出した岩場の磯となるのか。

ツガはツカで「塚とか高い所」と言う意味がある、またカルは「崖地」のことなので高い崖地のある磯か。

オンはどう言う意味なのだろうか。大漁を感謝するオンなのか、オンには敬語ようなものを感じるのだが。

ロクは「陸地」の意がありゾウはソで「磯」を言う、しかしこのロクには他の意味があるように思われてならない、強いて陸地の張り出した磯とでも言うべきか。

ロクゾオの東側の磯と言うことだろうか。ここはツガルの左側の磯である。

ウナギはウツボのことである、ここは何時もウツボ漁をしていた磯なのか。

長ん根	ナガンネ	磯の地名として多い、ここも横に長い岩であろう。
ぐみ山	グミヤマ	地名にもぐみ山がある、クミは「入り組んだとか曲がる」などの意がある、またヤマは「崖地が幾筋もある」と言うことなのでここは入り組んだ崖地の磯を言うもののように思われる。
おねいも	オネイモ	オネは「根際」で根元の意がある、イモはウモノ転と考えれば「埋められた地」で土砂崩れのことになる、ここは磯の根本まで崩れた土石で埋まった所となるがどうか。
たかい	タカイ	ここは文字通り高い岩礁と言うことか。
おおでばり	オオデバリ	文字通り磯の部分が大きく張り出している状態を言うものであろう。

かみつづみ	カミツヅミ	ツヅミがツツムの転であれば「岬に包まれた」と言うことである、ツツであれば「遮るとか立ち塞がる」でいずれも崖地を表わす、カミは「上」の意であろう。ここは高い崖地の磯を言うものであろうか。
小野エ門	オノエモ	オネイモと同じ地名ではないか、崩壊した磯の意があるように思える。
長　根	ナガネ	長い根と言うことか。
中の根	ナカノネ	真中にある根であれば、左右に岩根がある筈である。
せんちちろ	センチチロ	センは「千」で数多くと言うことである、チチロがツシロの転で漁場を言うのであれば、ここは多くの漁場のある磯または海岸になる。 またここは島の南々西に当たる海岸の総称である。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
めんごり	メンゴリ	メングリと同じ意味なのであろうか、小さい穴のあると言うことか、また回り込む磯と言うことであろうか。
なばたけ	ナバタケ	ナバはナハの転で「漁場」を言う意があるとされ、またタケは「高い・嵩」で高い崖地を指すので、ここは高い崖地の釣り場となるのか。
きんし根	キンシネ	キンシをキシとすれば「崖地」の意味になる、ここは切り立っている岩根なのか、また切り立つ崖地の下の岩礁と言うことか。
長　ん　根	ナガンネ	他の長根とおなじように横に広がる岩根なのか。
金長のやせ	キンナガノヤセ	キンはキで「崖地とかきざみ目または断絶」を言う意で、ナガは「長い」ここは刻み目のある長い崖地の岩場

鋸引	ノコギリビキ	の磯となるのか。 およそ五〇米程の直立した海蝕崖が、鋸で真二つに挽き割ったように裂けて海に落ち込んでいるので、鋸引きと言うことであろう。
金長の鼻	キンナガノハナ	崖地が長く続く岬のことであろうか。

猿が崎の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
こあだ	コアダ	アダはワダで「海の湾曲した地点」を言い、コは「小」であろう、ここは小さい湾とか小さい入り江と言うことであろう。
ふじやま	フジヤマ	三浦湾の口元を塞ぐようにしている岩根で、中央が高いので富士山と言ったものか、フジは「小高い」の意が

八の字	ハチノジ

三浦湾のコアダの入り口近くの崖の上にやゝ斜めであるが八の字が見える、自然の割れ目で海鳥の排泄物で白く、浮き出しているのでこれが地名になったものと思われる。

突つき出し	ツツキダシ

岩礁に上向きの穴があり、干潮にはその中え体を入れて割れ目から海老を捕らえたので、割れ目を突つきだすことを言うものであろう。

長ん根	ナガンネ

ここも長い岩根である。

さんぼう	サンボオ

サンボウライは波風とも強いことで、ナムサンボウは「しまった」と言う瞬間の危険な状態を表わす言葉である、三方は神仏に供物を載せる台であるので、方形の岩を言うことになる、ここは何時も危険な岩根と言うことであろうか。

八エ門	ハチエモ	人名に由来するのか。
およぎだし	オヨギダシ	泳ぎ始めると言うことであろうか、磯伝いに歩いて行きこれからは泳がなくては先にいけない所と言うことか

三浦の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
奥で張り	オクデバリ	デバリは「出っ張る」で磯のうち突き出している所を言う、オクは奥でデバリの奥の方と言うことである。
上ので張り	ウエノデッパリ	ウエはスエで「末とか端し」になるが、デバリが三ヶ所あり、その中となるように思えるので、これは地形的な呼び方であろうか。
前で張り	マエデバリ	ここのデバリは「近い」の意ではないか。
おれったち	オレッタチ	この磯え降り立つた所である。

三浦	ミヨオラ	ミヨはミオで「澪・水脈」を言い舟の水路のことを指し、オラはウラで「浦とか陸地の端し・陸地の末」などの意になる、ここは舟の水路を言うのではないか。またこれがこの湾全体の呼び名になったものと思われる
烏沢	カラスジャア	カラは「涸れるとか石混じりの地」の意がある、スは「州」のことで浜を表わす、しかしジャアを沢とすれば「谷や湿地」となるが他に意味があるのだろうか。ここは石混じりの浜であろう。
鵜鳥穴	ウドリアナ	文字通り鵜の集まる所とか、巣穴でもあるのか。
高い根	タカイネ	ここは背の高い岩と低い岩との比較で、名付けられたものと考えられる。
低い根	ヒクイネ	
三十	サンジュウ	難解な地名である、強いて言えば傘状に崖地が落ち込んでいる所なのか、また崖地に三十の文字があるのか。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
長崎	ナガッサキ	長く突き出した岬ということであろう、
うけば	ウケバ	ウケは釣りの浮き子のことで、ここは釣り場と言うことであろう。
池口	イケグチ	島の年中行事に二十五日様がある、旧正月の二十五日に忌みの神がこの長っ崎の磯に渡られ沐浴すると言う池があるが、その池の下の入り江を池口と言う。
角振場	ツノフリバ	ツノは牛の角で出来た疑似針を言い、竿に付けて魚を釣るが、ここはその竿を振り魚を釣る場である。
三宅向	ミヤケムキ	三宅島が対向して見える所である。
みこの岡	ミコノオカ	ミコが「水篭り」であれば、水面の下の岩になる、オ

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
たぼ	ダボ	カは「丘・岡」で海に対して陸地のことなので、暗礁のある磯と言うのだろうか。 ダボはタボで髪型の「髻」（タボ）の意であろう、ここには崖地にタボ状のこぶが付いていて、それを足がかりに渡る磯である、そのタボ状のこぶを言うものか。
鉢あさら	ハチアサラ	ハチは「中がくぼむ」と言うことで、アサラは暗礁を言う、ここはすり鉢状になっている暗礁を言うのか。
かなしき	カナシキ	鍛冶職人が金属を打ち鍛える長方形の台で鉄床（カナシキ）のことである。これはその形から名付けられたものであろう。

ぶざえも	ブザエモ
おちない	オチナイ
はなれ	ハナレ
戸棚	トダナ
おおご	オオゴ

ブザをフシの転と考えれば「周囲に山などがある地」また「高い地」と言うことになる、エモはエミの転で、「江回り」で岩岸を潮流が回る意になる。島でヒラトコと呼ぶ平坦な低い磯で、高い崖地の下になるが、人名による語源かも知れない。他の説でも人名からとしている。

オチは「高い所」の意で、ナイはナスの「成し」になるここは高くなっている所と言うことであろう。

ハナレは「離れる」であるが、ここは突き出した状態で周りより一段高くなっているのでハナレと言うのか。

戸棚状の崖地であるからであろう。

オオはオホまたはオフの転で「山などを背にした磯」コはコシであれば「崖地」コであれば「場所」を言う、高い崖地を背負う磯となるのか。

この口	コノクチ
東八	トウハチ
お神主	オカンヌシ

コは「高い」ノはノマの転で「崖地」となり、クチは入り江の出入口と言うことであろう。

他の説によれば八丈小島に同名の地があり、小さな入り江に水取り場の川（コウ）があるのでとしている。

またコノクチは子宮（コブクロ）の口であるとも言う、ここは全体に高い崖地に囲まれた入り江となるのではないか。

トウは「崩れた崖地」の意であり、ハチはハシの転で「端し」またシは「石とか磯」を言うので、トウ・ハ・シの崖地の端の磯となるのか。

江戸後期から明治にかけて栄えた、りょう船時代に地役人と神主を兼ねた松江家では「しんもげ」と「お神主」の二隻の船を所有していたが、このお神主船とここの地名は関係があるのだろうか。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
松山	マツヤマ	マツは「捲く・曲がる・松」などの意があり、岬の突きだした所を言うがここは松の木の密生した傾斜地なので、松の山と言うことか。
うけ場	ウケバ	ウケは釣りの浮き子のことで釣りをする場であろう。
十字路	ジュウジロ オ	難解な地名である、ここは二方の入り口を持つ入り江で中央が膨らんだ形で水深は一五米位であろうか。この入り江の名の由来と思えるジュウジロは何を言うのであろうか。
しらったい	シラッタイ	シラッタイは「平ったい」で平なと言うことであろう平な岩根と言うことになるのか。
しなつく	シナツク	シナは「階」で段丘のことツクは「尽き」の急傾斜地

万右門あさら	マンエモアサラ
松が下	マツガシタ
荷取場	ニトリバ

の意がある、段丘状の傾斜地と言うのか。
ここは周囲を絶壁に囲まれた釜のような小さな入り江で中には橋が架けてあり、漁船の舟溜りと舟揚場があった冬季定期船が来航するとこの入り江で艀で乗客の乗降をしたり、貨物の積み降ろしをしたもので、傾斜の強い崖地を重い荷物を頭に載せて運ぶ女性達の姿が見られた。今は三浦漁港の舟揚げ場に変わって昔の姿を消した。
荷物の品（シナ）が着く、シナツクか。

アサラは浅瀬とか暗礁を言う島の言葉である、ここは部分的に水面から頭を出しているが、何時も白波の砕ける所である、マンエモは人名に由来するのか。

三浦漁港の船揚げ場になっている辺りで、松の木の茂る岩場の磯であったので、松の下の磯と言うことになる

港の施設のない時代には、西風の吹く冬季は兎角島の

はずなどり	ハヅナドリ	生活物資が途切れることが多かった、ここは台形上の岩だったので定期船から艀でこの岩場え貨物を上げ下ろしをしたもので、それが荷取り場の地名の元であろう。昭和四十二年八月美濃部亮吉東京都知事は初の神津島視察はこの荷取り場え艀で上陸した。 現在の三浦漁港の船溜りにかってあった岩礁の名。

多幸湾の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
船戸が沢	フナトガサア	三浦漁港の漁協発泡スチロール工場と向かい合う辺りで、急傾斜の崖地に挟まれた小さな砂浜があり、その入り口を塞ぐように岩礁がった、フナはフネの転で「船型」の意で、トガは「鋭処」で険しい崖地と言うことなので、険しい崖地の下の船の形をした地になるのか。 サワは沢またはサヤで「騒ぐ」の意になるがここはサヤで波が浜で騒ぐと言うサワなのか。

丸島	マルジマ	その形からの地名であろう、かっては多幸湾の一点の景物であったが、三浦漁港の中に取り込まれている。以前ここに弁天社の祠があったので、弁天島とも言う。
かっつき	カッツキ	カッツクは「一気に海底まで潜り込む」ことで、一気に走ることを言う、ここは天上山からの落石を注意しながら走る浜の意であろう。
走り	ハシリ	カッツキと同じように山からの落石を気にしながら走るので、それが地名化したものか。
荒川	アラカア	アラカアは流れの激しい川の意で、水量もかなり多い流れである。
釜が下	カマンシタ	カマやカブは「傾し」で侵食による崩壊地とか、水際と言う意もあるのでここは崩壊地の水際を言うのではないか。

釜下の窟穴	カマンシタノヤアナ	崖地が庇状になっている所に大きな窟穴が口を開けて二つ並んでいる、窟穴の奥行きは裏の磯まで続くと言われているが、今は砂が口元を埋めている。

砂糠崎の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
前砂糠	マエザノカ	サノカはヌカとかヌキで「火山性の台地が急崖になっている所」ということである、マエは前なので手前のと言うことであろう。
奥砂糠	オクザノカ	ここは前との対比であろう。
そうだい	ソオダイ	ソオはソの転で「磯・裾・そそる」などの意があり、ダイはタギの転とすれば「タギタギしい」で険しい所となる、ネは「直立している」の意があると思われるのでここは直立した険しい岩根と言うことであろう。ソオがソネであれば「石混じりの磯」になる。

鏡穴	カガミアナ	カガミはカガとかカケの転で「崖地や芝地」の意になるが、ここは崖地のことで崖地にある穴を言うものではないか。

長根湾の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
こあだ	コアダ	コは「小さい」か、アダについては「崖地とか自然堤防」を言うが島ではワダで入り江または湾を言うので、ここは小さな入り江と言うことか。
煙草盆	タバコボン	ここはその岩根の形からの名であろう。
じょんぼ	ジョンボ	島の言葉でジョンボは痩せていると言う意で、その形からであろう。

たたき根	タタキネ
けんどん	ケンドン
しらったい	シラッタイ
かなしき	カナシキ
ひらざ根	ヒラザアネ

タタは「膨れるとか充満する」でタチ・タツであれば「台地や小丘陵」の意になるので、台地形の岩根と言うことか、島にタタキ漁と言う漁法があるが、それと関係があるのか。

ケンはケムでクエのこととも取れるので「崩れた所」の意ではないか。またドンはトムとかトビの「崖地」のことなので崖地のあるとか、崩れていると言うことであろうか。

島の言葉で平らのことを「シラッタイ」と発音する、また語意から考えても平な岩根と言えそうである。

その形からの名であろう。

ヒラは「坂とか傾斜地」のことで、ザアはサヤの転で「障り」の障害があることとなり、ここは割れ目などのある岩根と言うことだろうか。

ヒラッタイの平なと言うことではないように思える。

長根湾	ナガネワン	ナガは「長い」の意で、ネは「峰とか台地の麓また岩礁の磯」を言うので岩礁のある長い磯の地と言うのか。
勘太郎窟穴	カンタロヤアナ	冬季のえび刺し網漁にはこのヤアナの中にアテコバ（火焚き場）を作り冷えた体を温めたものである、ヤアナの岩壁がトラウツボ（島で勘太郎うなぎと言う）の色に似ているので、この呼び名になったと言う。
おれったち	オレッタチ	磯へ降り立つ所と言う。
ぼっかく	ボッカク	ホは「垂直とか水平に突き出した」と言う意で、カクはカケ・カキの欠けると言う「崩壊」のことなので、大きい岩が崩壊した磯であろう。
鷹の巣	タカノス	タカは「高い」スは「砂・州」になるが、ここは長根湾に屹立する二十米位の岩根である、ここは鷹の巣があるからと言うことであろう。

長根	ナガンネ	横に長い岩根のことであろう。ここが長根湾の地名の元なのだろうか。
勘兵ぎぼ	カンベエギボ	カンベエは人名に由来するものだろうか、ギボは擬宝珠のことで、瘤状の岩根と言うことか。
長五郎	チョウゴロウ	人名に由来するものか、長五郎が何々をしたと言うことかも知れない。
長池	ナガイケ	孤立した池ではなく、岩と岩の間の海水の部分を言うものであろう、岩の間に出来た長い水の開放部と言うことのように思える。
沢向き	シャアムキ	サは「小さい」でムキは「剥け」で崩壊した崖地を言うものであろう、
横瀬	ヨコセ	ヨコは「横」セは「瀬」で潮流の当たる所と言うのかまた「狭い」のセであれば横に狭いと言うことか。ここは潮流が横に流れ切るの意があるような気がする。

横瀬ぎぼ	ヨコセギボ	横瀬の磯に対向している瘤状の岩礁である。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
みとうじ	ミトオジ	ミは接頭語か、トオはタフで「潰」の崩壊地の意で、シは「石とか磯」のことである、ここは崩壊した海岸を言うのではないか。
ふどうそう	フドオソオ	フドオはクドの転で「崖・荒れ地」とか「険しい」の意である、ソウをソネとすれば「磯根」でここは険しい磯のことになる。
てごなみ	テゴナミ	テゴはトガの転と考えれば「鋭い所」で崖地を言う、ナミはナメで「並んでいるとか滑らかな所」となるのでここは崖地の下の滑かな岩が並ぶ磯と言うことか。

広島	ヒロシマ	ここは広島の国船が遭難した所で、それが地名になったと言う伝承が残る磯である。
観音浦	オカンノオ	ここの海岸の奥に観音菩薩を祀る庵があるので、それが地名になったものか。
大根	オオネ	比較して大きい岩と言うことであろう。
うんじょう根	ウンジョウネ	観音浦の西国三十三ヶ所の菩薩を刻んだ石碑は、島の札所として信仰されているが、この建設のとき石碑の運搬を運上として島の人に労役を課したときの名残であろうか、またはこの札所以外の理由があるのだろうか。
赤土	アカツチ	ここは土の赤い所と言うことであろう、古語ではハニが赤い土と言うことであるので、新らしい地名かも知れない。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
作根	サクネ	サクは「裂き」「狭い所」と言う意がある、「裂き」であれば険阻なであり、「狭い所」であれば小さなとなる、ここは険阻な岩場と言うことになる。
白根	シラネ	白か平で違ってくるが島では両方をシラと言うので、ここはヒラの平らなと言うことか。
岡作根	オカザクネ	作根より陸地側の岩根のことであろう。

走る間の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
牛鼻	ウシバナ	他の説では牛に似た岬としている、ウは「大」でシは「石・磯」で、ハナは岬なのでここは大石の岬になる。

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
ろうは	ロウハ	ロウは「高い」の意、ハは「端」であるが高い崖地の島ではウツボをウナギと言うが、ここはそのウナギの漁をする岩礁と言うことであろう。
うなぎ根	ウナギネ	
なる沢	ナルサア	ナルは「緩い傾斜地」を言うがここは波の音の意もあるように思える、ここの磯には崖地の中腹から多量の水が滝のように流れ落ちている。
夏見崎	ナツミザキ	ナツミをナズミの転とすれば「泥地」の意になる、ここは上流部からの雨水が土砂を含んで流れ落ちてくる所なので、磯が泥水で汚れるからであろうか。
走る間	ハシルマ	ハシは「端」でマはママで「崩壊地」のことであろうここは崩壊地の端しの磯となるのか。

大やせ	オオヤセ	端しでは説明が十分とは思えない。 ヤセは「痩せ」で荒蕪地とか磯を言い、特に島では岩石の多い磯を意味している、ここはオオで大きな石の磯を言うものであろう。
返す浜	カエスハマ	カヤは「谷・高地」スは「州」で砂浜を言う、谷や高い土地の下の砂浜を言うものであろう。
赤根	アカネ	アカは「上の意で高地とか高台」ハカで「崩壊した崖地」を言うので高い崖に成った岩根と言うのか。 または赤い色の岩根なのか。

礁・岩根の名	呼び方	地名考その他
恩馳島	オッパシ	ヲツは「高い場所」とか「沖」などの意がある、パシはハシで「挟む・崖地それに階」など段丘を言うことなので、沖の段丘状の島を言うものか。
亀あさら	カメアサラ	アサラは島の言葉で浅瀬または暗礁を言うので、ここは以前亀突き漁をした岩礁なのかまたは亀の形をした岩と言うことか。
平根	ヒラネ	平らな面をしている岩と言うことであろう、また小平根は平根に比して小さいと言う意味であろう。
小平根	コヒラネ	
万作根	マンサクネ	人名に由来するものか。
でばり	デバリ	突き出している意であろう。

さっぱん山	サッパンヤマ	サツは「狭い所」と言うことである、またパンはハムの転とすれば「省き」で削り取ると言う意味になるので崖地をあらわす。
沖のさっぱん山	オキノサッパンヤマ	ここは狭い崖地の山と言うことか。沖は沖側のと言うことであろう。
はづなどり	ハヅナドリ	ハズナは岩根に渡渉するとき船を繋ぐロープのことでそれを巻きつけることの出来る岩と言うことであろう。
新場長ん根	シンバナガンネ	シンバは南東の方向を指すことばである、ここは南東側にある長い根と言うことであろう。
鰹あさら	カツウアサラ	ここはカツオのよく集まる暗礁と言うことか。
ひらったい	ヒラッタイ	平らなと言う意味なので平坦な岩か。

か ど	カド	恩馳島の南西の方向の角にある岩礁のことか。
義経	ヨシツネ	ニッ並んでいることから義経・弁慶と一対の意味であるように思える。
弁慶	ベンケイ	
次郎八	ジロハチ	人名に由来するものか、
善八根	ゼンパチネ	ここも人名に由来するものなのか。
岡の烏帽子	オカノエボシ	烏帽子様の岩で恩馳島に近いからか。
沖の烏帽子	オキノエボシ	これは恩馳島より遠い烏帽子様の岩であろう。
かなしき	カナシキ	その形からの名であろう。
長ん根	ナガンネ	長ん根・長根の名が付く岩礁は九ヶ所ほどある、詳細に調べればそれ以上の数になるように思える。 そのために恩馳の長ん根・金長の長ん根と言う様に区分されている。 ここも横に長い岩根と言うことであろう。

祇苗島の部

磯・岩根の名	呼び方	地名考その他
大根	オオネ	オオは「大」であろう、他の岩と比較して大きいことを言うものであろう。
地の祇苗	ヂノタダナイ	ヂは「地」で本島寄りのと言うことである、タダをタチの転とすれば「台地とか館」の意になり、ナイのナは「土地」のことでイは「場所」を言う。ここは本島寄りの台形の島と言うことか。またナイは「地震」の意もあると言う。
新島向かい	ニジマムカイ	隣島の新島に対面している磯であると言うことであろうか。
長根向き	ナガネムキ	ここは長根湾に対面していると言うことであろう。

なだら	ナダラ	ナは「土地」のこと、ダラはタラの転で「垂れる」の意味になり、海蝕崖がなだらかに裾野を引く状を言うので、ここはなだらかな斜面を持つ岩根のことであろう。
沖の祇苗	オキノタダナイ	地の祇苗に比較して、それより沖の方にあるからと言うことであろう。
松が下	マツガシタ	切り立っている海蝕崖の裂け目に松ノ木が生えているその下のと言うことであろう。
明神下	ミョウジンシタ	祇苗明神を祀る祠がある磯のこと。
穴ん口	アナンクチ	文字通り洞窟の口元を言うものであろう。
こちが鼻	コチガハナ	コチは「東の風」を言うので、この風の吹き付ける岬と言うことであろう。
烏帽子	エボシ	烏帽子ように中央が突き立っている形の岩根であるので、名付けられたものであろう。

平段	ヒラダン	ヒラは「坂・傾斜地」のことで、ダンは「階段」のことである、ここは階段状の岩根と言うものか、平を「ヒラ」と呼ぶのは新しい時代になってからである。
かど	カド	平段と一体の岩根であるが、船の水路に面し一段高くなっている、水路の角（カド）になるので名付けられたものであろう。

追記

地名・字名の中で記載漏れがあったので、次の様に追記した。

字名及び地名	島での呼び方	字名及び地名考その他
網の沢	アミンサア	アミはアバ・アビ・など同系の言葉で、「崖地」「砂丘」の意味がある、ミは「水」のことでで湿地と考えられ、ここは崖地の湿地の沢と言うのではないか。

庵屋	アンヤ	東北の出稼ぎから帰ってきた島の人は、夢にまで見た連れ合いが既に不帰の人であることを知らされた。落胆の余り涛響寺住職のもとで仏道に帰依し、舎人川（トノリガア）の山林に庵を建て念仏三昧の暮しを始めたのは、天保の中期であった。その後の安政五年島の人達の寄進で、庵主が巡礼した坂東の札所三十三ヶ所の石塔を並べて、島の霊場として信仰の対象とした所である。
いかし	イカシ	イカは「角張っているとかいかめしいもの」の意がある、シは「磯とか岩石の多い所」を言うので、ここは険しい岩石の多い所となるのかも知れない。
一杯水	イッパイミズ	旧林道の中宮塚元徳本塚近くの湧き水のある一帯を言う、イッパイは僅かなと言う意味だろうか、また島の言葉でイッパイは（多い）と言うことなのか、この下には伏流水を集めた簡易水道の水源枡がある。
枝沢	エダザア	エダは「「水のある所・川沿いの湿地」また「枝状の

奥山	オクヤマ	谷・沢」を言うとあるので、ここは枝状に分かれている沢のことであろうか。 島の北部一帯の山林の総称であるが、ここの公有林を指す場合もある。
鎌が池	カマガイケ	中宮塚の沢にある池の名である、昔島の女が池の畔で山仕事をしていたが誤って手にしていた鎌を池の中へ落してしまった、あわてて池に入り鎌を探していたが、そのまま女は池の中へ姿を消して言ったと言う伝承のある池の名である。
観音づくり	カンノンヅクリ	難解な地名である、カンはカムノで「神の」の意になる、ヅクリはツクシで「断崖とか急傾斜地」のことになる、またノは「山麓の緩傾斜地」を言うのであるが、ここはどう言う意味があるのだろうか。 ここの樹木で観音像を刻んだことがあったものか。

げんぼう山	ゲンボオヤマ	昔ここに玄坊と呼ぶ僧が庵を建てて住んでいたと言う伝承から、地名が付いたと言う。尤も玄坊と言うのは特殊な地域で、僧侶に対する隠語であるとも言う。ここは戦後、村で蜜柑の苗を植え付けたり、青年たちがパインの栽培を試みたこともあった。
塞の河原	サイノカアラ	つづきの地蔵堂の先にある涸沢のことで、ここは愛児を喪った母親が、幼い者の冥福を祈る所とされていたので、名付けられたのであろう。
ド山	シタヤマ	シタは「垂れる」で傾斜地とか崖地を意味するが、シタヤマは島の北東部の磯の総称である、尚南西側はノマと呼んで、区分している。
巡検	ジュンケン	ジュンはシムの転で「浸み」の湿地とか水に関係のあることを意味し、ケンは「崩れ地」を言うので、ここは水のある崩れ地を言うのではないか。幕府は将軍代替りの折、使番を派遣して領主・代官の行

千文足袋	センモンタビ	政、山や海の地勢を視察させた、その使番を巡見使と称し、その使番が見歩く地であったからと伝えるがどうか。 神戸山で採石の際の屑石（ズリ）の捨て場であったがそのため崖地が大きく崩壊し、足袋の形であったので、大きな足袋、千文の足袋と名付けられた。
土橋	ドバシ	天上山林道が村道とりが沢線と分岐する辺りで、上流の沢からの雨水で道路が掘られるので、丸太を並べて小さな橋を架けてあった、何故土橋と言うのだろうか、丸太橋の前は土の橋であったのか。
殿の首	トンノウガクビ	トノはタナの転で「段丘・丘陵」を言い、クビは「くびれた地」を言うので、ここは高台の崖地のくびれた所と言うことであろうか。
びようびよう	ビョウビョウ	同じ言葉が重なるので、風が強く吹き付ける音響的な

宿り木

ヤドリッキ

表現のように思える。

付近に寄生木があるのでそれが地名化したものと思われる。

島の地名と似通う全国の地名を、拾ってみました。
町や村、山や川などのほか、温泉地そのほかに編入や、合併でその名前を消したところも出来るだけ拾いましたが、ただ似ているというだけで特別の意味はありません。
字が違っているものや、読みの異なるものもありますが、参考にしてください。

島の地名	各地の地名	県・郡・市町村名とその概略
赤ッ崎	赤碕町	鳥取県東伯郡赤碕町海岸部の町で赤碕港がある、酪農・養蚕・特に二十世紀梨の栽培地で知られる。
赤ン沢	赤沢林道	群馬県北部の三国峠下の法師温泉から、赤沢峠を経て四万温泉迄の林道でハイキングコースである。
赤羽根	赤羽根町	愛知県渥美郡赤羽根町は太平洋に面する町で、電照菊の特産地。
秋葉山	秋葉山	静岡県周智郡春野町と磐田郡竜山村の境にある、赤石山脈の一峰で、山頂に防火の神秋葉神社を祭る。
愛宕山	愛宕山	茨城県西茨城郡岩間町にある山で、愛宕神社の悪態祭

有馬
不入沢
いるか池
大沢

有馬
不入山
入鹿池
大沢

りで有名。

◎ 千葉県銚子市犬吠崎の西にある山で、地球展望台があり犬吠崎とともに観光地として有名。

◎ 千葉県鴨川市と安房郡丸山町の境にある山で、房総丘陵中の嶺岡山地に含まれる。なを付近に同名の山が、富津市南東部にある。

◎ 東京都港区にあり、寛永三馬術の曲垣平九郎で有名、頂上に愛宕権現が祭られている。

◎ 京都府京都市で丹波の国と山城の国境の山で、神仏習合の修験道場の愛宕神社は、火伏せの神として信仰が篤い。

兵庫県有馬郡有馬村は、兵庫県三田市に編入され消滅

高知県中部の山で、石灰岩の山。

愛知県犬山市の人造湖で、池畔に博物館明治村がある。

埼玉県埼玉郡大沢町は、埼玉県越谷市と合併消滅。

◎ 東京都三鷹市大沢は、東京大学天文台がある所である。

◎ 静岡県富士宮市で富士山西側の大崩壊地（大沢崩れ）

大尻

大平

大尻沼

大平

大平温泉

大平

大平町

大平山

◎

奈良県宇陀郡菟田野町の大字で、古くから辰砂（硫化水銀）を産出した大和水銀鉱山は閉山している。

群馬県利根郡片品村にあり、白根山の熔岩による堰止湖でひようたん沼とも言う。

オオダイラと呼び、長野県飯田市の山地中の小集落であったが、全村民が離村して市街地に移る。最近集落の保存運動が起きている。

山形県米沢市大平、松川の上流にある硫化水素泉である。オオダイラ温泉

オオヒラと呼び、愛知県岡崎市の国道に沿う集落、付近に大岡越前守の旧邸がある。

栃木県下都賀郡大平町、イチゴ・米麦を産する農業の町であったが、最近冷凍機・自動車関連企業の進出がある。

栃木県栃木市と下都賀郡大平町との境にある山で、山頂に太平山神社がある。

◎

山口県防府市東部にある山で、山頂にテレビ塔・庭園

小動物園などがある。また牟礼山とも言う。

大平川

◎大分県別府市の中部にある山で、扇山と言うが、別称大平山とも言う。付近にゴルフ場・森林公園がある。美濃三河高原の本宮山から発し、岡崎市の南で矢作川に注ぐ川。

大溜池

青森県西津軽郡木造町の砂丘の東端にある湖沼群の中の一つ。

大沼

北海道稚内市の幕別川下流の潟湖で、海岸沿いに浜堤砂丘が発達している、付近に稚内空港がある。

◎北海道亀田郡七飯町にある堰止湖である。また七飯町大字大沼には単純泉の大沼温泉がある。

◎秋田県鹿角市八幡平南部にある沼で、付近は湿原で近くに硫化水素泉の大沼温泉がある。

◎山形県西村山郡朝日町で最上川西岸にある湖沼の一つで、大小五十の浮き島で有名である。

大山

東京都板橋区の住宅街。

◎神奈川県中央部にある丹沢山地の南東にある山、雨降

小浜	小浜	山、阿夫利山とも言い、頂上に阿夫利神社、山腹に大山寺があり山岳信仰の霊山である。 オバマと言う、福井県小浜市で小浜湾に面する水産都市である、巾着漁によるサバ・タイ・カレイ・イワシイカの水揚げがある。 ◎長崎県南高来郡小浜町、島原半島西部の橘湾に臨む食塩泉の温泉地で湧出量が多いので有名。
風早	風早	広島県豊田郡安芸津町の西部の集落でミカン・ビワの生産地である。 ◎愛媛県北条市風早で、冬季の北西の風が強いので風早と呼ばれている。
桶川	桶川市	埼玉県桶川市で、大宮台地中部の新興都市、近年は精密機械・金属・食品等の近代的工場が多数進出、住宅化も急増している、また市内の薬師堂に熊野神社古墳がある。
河童池	河童橋	長野県南安曇郡安曇村の梓川に架かる木造のつり橋、芥川龍之介の「河童」に表われる橋の名。

かずら　葛島

香川県香川郡葛島町の葛島水道の沖合いに浮かぶ、南北に長い島。

蔓橋　カズラハシと呼ぶ、徳島県三好郡西祖谷山村の祖谷川の上流にかかり長さ四五米、蔓橋保存協会を作り、三年に一度付近の山に自生するシロクチカズラで、架け替える有料橋。

上里　上里町　埼玉県児玉郡上里町、コメ・ムギ・スイカ等の産地。

上の川　上三川町　カミノカワマチと呼び、栃木県河内郡上三川町で、特産物にカンピョウがある。

かごめ　鷗島　北海道桧山郡江差町の沖合いにある島で、付近に奇岩奇石が多い。

川尻　川尻　静岡県榛原郡吉田町で、大井川河口南岸の集落、ウナギ養殖は浜名湖岸を凌ぐ。

◎　熊本県熊本市の旧河口町で、近くに曹洞宗の大慈寺がある。

◎　茨城県日立市北部の港町で、川尻港は日立港の整備が進むにつれ、貨物の取扱量が減少した。

砂原	砂原町
	砂原市
十文字	十文字町
巡検	巡見街道
白島	白島
千代川	千代川

◎広島県豊田郡川尻町で呉市の隣の町、かっては漁業と熊野町から技術を導入した「川尻筆」で知られたが、自動車部品等の工業が発達している。

北海道茅部郡砂原町、噴火湾に臨むニシンで知られた漁業の町であるが、今スケトウダラ・イカ・イワシ・カレイ・タコ・コンブ・貝類の海産物を集散。

千葉県砂原市、利根川に面する商業都市で水陸交通の中継地として発達し味噌・醤油等の醸造業が多い。

秋田県平鹿郡十文字町、大部分が平地で典型的な水田農村、在来から製材・製菓・酒造・毛織物等の工業がある。

三重県北部の鈴鹿山麓を南北に結ぶ街道で、亀山市から鈴鹿・三重・員弁郡を北上して岐阜県不破郡関ヶ原町に至る。

シラシマと言い、福岡県北九州市の沖合に浮かぶ無人の島で北九州市の属島。

鳥取県東部と岡山県境の那岐山に発して、鳥取市で日

高の巣	鷹巣町	本海に注ぐ、その流砂は鳥取砂丘を作る。秋田県北秋田郡鷹巣町、木材・農産物等の集散地で、製材・木製品工業が活発。
	鷹巣山	都京都西多摩郡奥多摩町西端の山で、雲鳥山から東にのびる尾根上の一峰、
	◎	神奈川県足柄下郡箱根町にある山、山頂に鷹ノ巣城跡の土塁が残る。
	◎	広島県加茂郡福富町と高田郡向原町の境にある山である。
	鷹ノ巣温泉	新潟県岩船郡関川村大字湯沢字鷹ノ巣にある温泉、食塩泉で別名湯沢鷹ノ巣温泉。
鍛冶屋沢	鍛冶屋	兵庫県多可郡中町の中心集落で、西脇市に近いので綿織物業が発達し、播州織りの主産地でもある。
	鍛冶屋峠	三重県伊勢市横輪と渡会郡南勢町の境にある峠、
	鍛冶屋原	徳島県板野郡上板の中心地で、かって阿波三盆（砂糖）の生産地でもあった。
かよう	賀陽町	岡山県上房郡賀陽町で、タバコ・抑制栽培・マツタケ

	荷葉岳	の名産地。
	通生	秋田県仙北郡田沢湖町の田沢湖北東の鐘状火山で、付近に乳頭温泉がある。
河原	川原	岡山県倉敷市の児島半島西岸の集落で、水島臨海工業地域に属し、化学・食品工業が立地。
	河原町	奈良県高市郡明日香村で飛鳥地方の一地域、近くに橿原神宮・岡寺・聖徳太子創建の橘寺等と幾つかの陵墓がある。
おかんのう	観音寺市	鳥取県八頭郡河原町、水利に恵まれた米作地で富有柿の特産地、樋口神社を祭りまた、因幡の素兎にまつわる伝承地でもある。 香川県観音寺市、瀬戸内海航路の観音寺港があり、魚市場・水産加工工場・製氷工場が盛、近くに琴弾公園がある。
櫛が峰	櫛ケ峰	青森県青森市と黒石市それに南津軽郡平賀町にかかる南八甲田山連峰の一峰、別称を上岳とも呼ぶ、頂上は高山性の潅木林地。

黒崎

黒崎

◎福島県耶麻郡猪苗代町で磐梯山北東にある山、北側中腹一帯は磐梯吾妻高原で、北東麓に川上温泉がある。岩手県下閉伊郡普代村の野田湾口にある岬、海岸段丘が発達している。

◎宮城県牡鹿郡牡鹿町の牡鹿半島先端の岬、北西方に鮎川漁港がある。

◎京都府宮津市の宮津湾東側の岬、南西に田井の漁村がある。

◎岡山県倉敷市の南西端で、玉島地区の集落、里見川の河口の港町、背後の丘陵はブドウの産地。

◎福岡県北九州市八幡区の黒崎一丁目から五丁目迄、洞海湾南岸に臨む北九州工業地帯の主要部、電機・窯業セメント・化学肥料の大工場が多い、もと遠賀郡黒崎町であった。

黒島

黒崎町

黒島

新潟県西蒲原郡黒崎町、有数の米作地であったが近年新潟市からの住宅・工業の進出により都市化が進行。

和歌山県日高郡由良町、紀伊水道に面する湯浅湾口、

湯浅湾最大の島で、ハマカズラが群生。

◎長崎県佐世保市相の浦の沖合で、東西に長い台地状の島で、隠れキリシタン集落があった。

◎山口県岩国市広島湾内の小島で、カコウ岩からなる沈水島、

◎長崎県南松浦郡富江町で、五島列島福江島の富江湾口中央部にある島。

◎鹿児島県鹿児島郡三島村枕崎の沖合六〇キロの洋上に浮かぶ火山島。

◎大分県臼杵市臼杵湾北部の小島で、三浦按針の漂着地として知られる。

◎沖縄県八重山郡竹富町で、石垣島の沖合にある、隆起サンゴ礁の島。

神戸　兵庫県神戸市大阪湾の北西岸の都市、商業都市で国際的港湾所在地。

御殿山　東京都品川区北部の住宅地。

五郎兵沢　長野県北佐久郡浅科村の一地区で、薬用ニンジン・高

神戸市

御殿山

五郎兵新田

ごんごん山	権現山	原野菜・カーネーションを栽培、五郎兵新田は近世末期、鹿曲川から用水を引いて開田。
		ゴンゲンヤマである、秋田県の南東部湯沢市にある山で、東鳥海山と言うが別称を権現山とも呼ぶ。
		◎ 岐阜県と福井県境にある山で、熊野白山のことで、別称を権現山と呼ぶ。
		◎ 山梨県大月市と北都留郡の上野原町との境にある山。
		◎ 山口県美祢郡秋芳町と、大津郡三隅町との境にある山
金毘	金毘羅山	三重県志摩郡志摩町の御座岬背後の山である。
背負崎	潮崎	兵庫県淡路島の三原郡南端町で、草に覆れた円錐形の山である。
	塩崎	山梨県北巨摩郡双葉町で、同郡塩崎村は双葉町に合併して消滅、米作と養蚕地帯であったが、最近は外来資本によりブドウ栽培とブドウ酒醸造が営まれる。
地獄	地獄谷	町内に中央本線の塩崎駅がある。 北海道登別市の登別温泉にある渓谷で、笠山の噴火口跡と大砲地獄・釜地獄・奥地獄・鉄砲地獄などがある

地獄温泉

◎富山県中新川郡立山町で、立山の頂上西直下にある爆裂火口、鍛冶屋地獄・紺屋地獄・百姓地獄・大安地獄などがある。

地獄谷温泉

熊本県阿蘇郡長陽村にある緑礬泉硫黄泉の温泉地、付近に京都大学理学部付属火山研究所がある。

長野県下高井郡山ノ内町にある硫酸塩泉の温泉で、渋の地獄谷噴泉塔があり、近くの野猿公園では岩風呂に入浴する猿を見ることができる。

◎富山県中新川郡立山町室堂の硫化水素泉、立山信仰の中心地。

白根

白根山

◎栃木県と群馬県の境にある山で、日光白根山とも言う

◎群馬県と長野県境の山で、草津白根山とも言う。

◎山梨県と静岡県境にあるので甲斐白根山とも言う。

白根温泉

群馬県利根郡片品村にある食塩泉の温泉で、白根山の登山口。

せんき

前鬼

ゼンキと読む、奈良県吉野郡下北山村大峰山の修験道の宿坊のある小村、地名は大峰山を開いた役の行者に

塚原	塚原
高根	塚原温泉 高根村 高根町
滝川	滝川市
多幸	多古町 多古鼻
畳ケ鼻	畳平
旦那山見	旦那

従った前鬼・後鬼が住み着いたことに由来すると言う

大分県大分郡湯布院町の塚原盆地にある集落、地名は数多くある塚（古墳）に由来すると言われるが、この塚は自然の地形であるとされている。

同じ湯布院町の伽藍岳の西麓にある緑礬泉の温泉。

岐阜県大野郡高根村、飛騨川沿いで平地が乏しい山村で、上流部に高根ダムがある。

山梨県北巨摩郡高根町、美しの森を中心とした、夏期休養地（清里）

北海道滝川市の石狩平野の北部にある商業都市でもある、タマネギの特産地。

千葉県香取郡多古町、栗山川の上流にある農業の町。

島根県八束郡島根町野波の島根半島北端の岬。

長野県と岐阜県との境にある乗鞍山の、山頂を畳平と言う。

静岡県田方郡函南町の旦那盆地を言い、東海道線と東海道新幹線の旦那トンネルがある。

つづき	都筑
寺町	寺町通り
塔の沢	塔の沢温泉
秩父山	秩父市
つがる	津軽海峡
天上山	天上山

◎広島県広島市南区の南部の住宅地、かっては漁村であったが、工業用地造成のため漁港の機能を失う。

静岡県引佐郡三ケ日町の一地区、ミカン・イグサ・花弁・遠州瓦を産し、ウナギの養殖が行なわれている、只木には神明宮裏の石灰石採掘場から、洪積世の人骨が発見され「三ケ日人」と命名された。

京都府京都市の中央部の南北に通じる道路で、通り沿いに梨木神社・本能寺・京都市歴史資料館がある。

神奈川県足柄下郡箱根町の、箱根七湯の一つで、食塩単純泉。

埼玉県秩父市は織物で知られているが、秩父銘仙は夜具地やトリコット製品に変わり、一部にその名残を留めるだけである、武甲山は石灰石の宝庫でセメント工業が立地、秩父神社の夜祭と秩父札所は、近辺の町村を含めて有名。

本州と北海道を分ける海峡。

広島県佐伯郡湯来町と山東郡筒賀村の境にある山。

とりが沢	鳥居川	長野県北部の戸隠山麓に発し、千曲川へ合流する川。
長浜	長浜町	◎ 滋賀県大津市の一地区で、石山鳥居川町。 高知県高知市長浜町浦戸湾に臨む商業の町、雪渓寺は長曾我部元親の菩提寺、鎌倉期の薬師如来像ほか、貴重な文化財がある。
	長浜市	◎ 愛媛県喜多郡長浜町で、伊予灘に面した農林・漁業の町、ミカン栽培と沿岸の漁業、長浜港からは木材・鉱石・砂利の積み出しが行なわれている。 滋賀県長浜市、県北東部の機業都市で、繊維工業の他合成樹脂・金属・機械・ゴム・食品などの工業が発達商工業都市として近江商人を輩出、北東部の国友は鉄砲鍛冶の集落、また石田は石田三成の生地、曳山で有名な八幡神社・長浜城園・姉川の古戦場跡がある。
中原 なきり		神奈川県平塚市中央部の住宅地。 三重県志摩郡大王町の中心、カツオの水揚げが多い遠洋漁業の基地の町。
那智	中原 波切	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町で、那智川流域の宗教・
	那智	

	観光の町、那智滝や熊野三山の一である那智大社、西国三十三ケ所第一番青岸渡寺があり、熊野信仰の中心地、碁石用の那智黒でも知られる。	
鳴沢	山梨県南都留郡鳴沢村、山仕事と出稼ぎの町であったが、富士スバルラインの開通で観光地化してきた。	鳴沢村
西向	ニシムカイと言う、和歌山県東牟婁郡西向村は、同郡古座町等と合併して消滅、かっては熊野水軍の根拠地でもあった、木材の集散地で製材工場が多い。	西向
この口	ネノクチと言う、青森県上北郡十和田湖町で、十和田湖から奥入瀬川が流出する地点の北岸にある集落、子の口港は十和田湖遊覧の基地。	子の口
日向	ヒナタと呼び、群馬県北西部で子持ち山・小野子山の南麓の一帯、吾妻川北岸地方を指す地名で、対岸の榛名山北麓地方を指す日陰に対しての慣用語。	日向
	宮崎県日向市で日向灘に面した都市、江戸時代に日田代官所の（大分県）手代所が置かれた富高と、臨海工業地域の細島が市の中心地、妙国寺庭園が有名。	日向市

三笠

もうり

三笠市

三笠山

毛利町

森

森町

北海道三笠市石狩川の支流幾春別川の上・中流を占める鉱山都市、石狩炭田の中心地。

奈良県奈良市の東部にある山で、山名は春日大社の東側で笠を伏せたような形からとされる。

東京都江東区の北部の町、地名は紀州の毛利藤左衛門が埋め立てを行なつた為と言う。

大分県玖珠群玖珠町で、旧森町は玖珠町と合併して消滅、童話作家久留島武彦の童話碑、五月五日は日本童話祭が開かれる。

北海道茅部郡森町、内浦湾を臨む町で沿岸に漁業集落が発達し、スケトウダラ・サバ・カニ・コンブを水揚げ、水産加工業が盛、火山灰地に覆われるが土地改良でマメ類・ジャガイモ・アスパラガス・野菜・果実を産出、火山灰を利用する軽石ブロックを生産している

◎

静岡県周智郡森町、・シイタケ・次郎ガキ・木材の集散地で、製茶・製材・陶器工場がある、「森の石松」ゆかりの地で、石松の墓と称するものがある。

母里		島根県能義郡伯太町の中心集落、同郡母里村は合併により伯太町となる、東母里地区には伝統的な母里焼きを伝えている。
桃山町	桃山	和歌山県那賀郡桃山町、紀の川と支流貴志川の合流点で、農林業の町。
八木山	焼山	福岡県飯塚市の西にある、準高冷地の農村で、八木山峠にかけての広い谷で野菜を栽培。
八木山団地		宮城県仙台市の南西部の丘陵にある住宅団地、八木山動物公園・東北工業大学がある。
八子ケ峰	やしみね	長野県茅野市と北佐久郡立科町の境にある、北八ケ岳の蓼科山南西方にあるなだらかな草原の峰。
荒川	荒川	栃木県中部の高原山地の釈迦ケ岳付近に発し、烏山町付近で、那珂川に注ぐ川。
	◎	埼玉県西部の甲武信岳にその源を発し、東京湾に注ぐ現在の荒川放水路。
	◎	山形県中部の朝日岳に発して、南流し新潟県で日本海に注ぐ川。

荒川町
荒川村

上山高原

奥山

長崎の鼻

◎ 新潟県西部の妙高火山群の焼山から源を発し、上越市の直江津で日本海に注ぐ川。

◎ 山梨県中部関東山地の国師ケ岳に源を発し、甲府市街地の南で笛吹川に注ぐ川。

山形県岩船郡荒川町、新潟早場米「荒川米」の産地。

埼玉県秩父郡荒川村、木材・石灰石それに養蚕が行なわれる。

兵庫県美方郡温泉町の扇ノ山（オウギノセン）東斜面を言い、夏季は但馬牛の放牧、冬季はスキー場。

静岡県引佐郡引佐町、同郡奥山村は引佐町と合併により消滅、浜名湖北岸の町で、永正年間に駿河の国富士根原から七戸移住したのが始まりと言う。

香川県高松市屋島北端の岬、近くに長崎砲台跡、東側に長崎集落がある、

千葉県銚子市南端の岬、酉明浦とを隔てて北の犬吠埼に対する。

◎ 長崎県北松浦郡大島村の大島北端の岬、東岸は大根坂

湾となり、西岸は急崖。

◎鹿児島県揖宿郡山川町、薩摩半島の最南端で、東支那海に突出する岬、別称を竜宮崎、近くに浦島太郎の伝説を残す竜宮神社がある、社殿付近は蘇鉄自生北限地でもある。

長沢　長沢の池　山口県山口市鋳銭司と防府市大道の境にある溜池で、寛永五年、小郡代官東条九郎右衛門が築き、鋳銭司・大道・名田島地区を潅漑。

鋸引　鋸崎　福井県大飯郡大飯町で、若狭湾に突出する大島半島先端の岬、東の内外海（ウチトミ）半島先端の松ケ崎と対向して、小浜湾口を作る。

鋸山　千葉県富津市金谷と安房郡鋸南町の境にある山、砂質凝灰岩からなる鋸の歯のような山容が、山名の由来。

◎東京都西多摩郡奥多摩町にある山、御岳山から大獄山御前山へ続く尾根上の一峰。

ひらん沢　平沢　◎山梨県北巨摩郡白州町と長野県上伊那郡長谷村との境にある山で、別称を鋸岳とも言う。

秋田県由利郡仁賀保町で、旧平沢町は合併により、仁

賀保町と改め平沢町は消滅、平沢漁港はハタハタ・赤エビ・サメ・カレイの水揚げがあり、大正一二年油田が開発され昭和石油・帝国石油の工場が立地。

長野県木曽郡楢川村で、奈良井川上流域を占める山村役場所在地の平沢は、近世から漆器の生産地。

◎

ひろしま

広島市

広島県広島市、瀬戸内海の広島湾の奥に臨む中国地方有数の大都市で、昭和二十年八月六日、史上最初の原子爆弾を受けて瞬時に壊滅したが、其の後の復興が目ざましく経済・文化の中心地となる、大田川筋と海岸沿いに東洋工業・三菱重工業・日本製鋼などの基幹工場と多数の下請け工場群が集まる。

広島町

北海道札幌郡広島町で、火山台地の上で酪農・畑作が行なわれている、広島県から十九戸移住したのが始まりと言う。

広島

香川県丸亀市で瀬戸内海の備讃瀬戸にある、塩飽諸島最大の島、零細な畑作と沿岸漁業の他採石業がある。

ふかい	深志
ふどうそう	不動岡
船戸ケ沢	船戸
前浜	前浦
孫平根	孫崎

長野県松本市の旧称で、松本盆地中央の商工業都市で電機・酒造・食品・機械工業が立地している、市内を流れる女鳥羽川北岸を北深志、南岸は南深志と称し、北深志は松本城（深志城と言った）武家屋敷があり、南深志には町屋が設置されていた。
市内には、松本城・開智小学校本館・松本民芸館・筑摩神社・牛伏寺があり、また浅間・美ケ原・扉・崖ノ湯等の温泉がある。
埼玉県加須市の門前町で、利根川上流から流れてきた不動尊像を祭り、不動岡と称したとされる関東三大不動の一つで、門前町の面影を色濃く残している。
和歌山県那賀郡貴志川町の一地区、江戸時代は大和街道と船戸街道の分岐点で紀の川の渡渉地点であった。
岡山県笠岡市の笠岡諸島南端の六島の、東岸に六島の中心集落前浦がある。
徳島県鳴門市の大毛島の北端の岬、鳴門海峡の最狭部で、付近の鳴門公園は観潮で有名。

松山

松山市

愛媛県松山市、県庁の所在地で、海岸部は石油化学・ソーダ工業等の工業地域で、東部は道後温泉を中心にした保養地でもある。

松山町

鹿児島県曽於郡松山町で、川沿いの水田作の外サツマイモ・タバコ・畜産・養蚕がある。

◎

宮城県志田郡松山町で、中心集落の松山は、古来からの城下町であったが、鉄道や国道からはずれている。

◎

山形県飽海郡松山町で庄内平野の東部最上川に沿う町中心の松嶺は古来からの城下町、製糸・板麩・庄内柿の生産地。

ママ

間々田

栃木県小山市南部の工業地域で、日光街道沿いの元宿場町、旧暦四月八日の蛇祭りは参観者が多く、栃木県における竜蛇信仰の代表格。

みこ

神子畑

兵庫県朝来郡朝来町で、円山川の支流神子畑川上流域にある鉱山集落で、明延鉱山から全線がトンネルの専用軌道があり、東洋一と言われる大選鉱場がある。

神子元島

静岡県下田市で伊豆半島の沖合の小島、磯釣りの名所

みとうじ	三頭山	私有地であるため渡島には許可が必要。東京都西多摩郡奥多摩町と桧原村、山梨県北都留郡小菅村と上野原町の四町村を境にする山で、別称をみとうやまとも言う。
	美東町	山口県美禰郡美東町で中心の大田は、小郡から萩市・長門市へ通じる地方主要道分岐点の元宿場町である。
みのわ	三の輪	東京都台東区の北端で、中小企業の集中地である、江戸時代には、南千住から三の輪にかけて箕里と言い、大名の下屋敷があった、近くの浄閑寺は新吉原遊女の投げ込み寺として有名。
	箕輪町	長野県上伊那郡箕輪町伊那盆地の北部で、水稲・酪農を主体にした町であるが、中央自動車道の開通後は精密・電子工場が進出している。
	三輪鉱山	埼玉県秩父市の武甲山北西麓にある、秩父セメントの石灰石鉱山で、我が国屈指の産出量を誇る。
宮原	宮原町	熊本県八代郡宮原町、製材・酒造工場があり立神峡の景勝地で、付近に縄文貝塚・前方後円墳・横穴古墳群

三浦	三浦市	がある。神奈川県三浦市、三浦半島南西部の水産と観光都市、遠洋・沿岸漁業の根拠地としての三崎港があり、城ケ島・油壷・剱崎などの観光地と、北部の台地は近郊農耕地で三浦ダイコン・三浦スイカの産地でもあり、江戸時代には風待ち港、避難港として繁栄した。
明神山	明神山	高知県吾川郡吾川村と愛媛県上浮穴郡美川村・同郡柳谷村の境にある山で中津山と呼ぶが、別称を明神山とも言う。
	明神ケ岳	神奈川県足柄下郡箱根町と南足柄市の境にある、箱根火山の一峰、
	明神峠	広島県安佐北区と山県郡千代田町の境にある峠で、海見山と冠山の鞍部でもある。
向山	武華山	北海道上川郡上川町と常呂郡留辺蘂町の境にある山で別称をむかざんとも言う。
森田	森田町	青森県西津軽郡森田村、岩木山の山麓地帯でリンゴ・水稲に加え、酪農が盛、近くの丘に石神遺跡がある。

森田町

福井県福井市の地域で、編入で森田町は消滅した、福井機業地帯の中心地、戦災と昭和四十八年の福井地震で壊滅、復興後は下水道普及率・都市公園率は全国一機械・繊維・プラスチック加工・食品加工業が活発、東・西本願時別院・養浩館跡・安養寺・新田義貞戦没地と伝える燈明寺畷・柴田勝家の墓がある西光寺など史跡が多い。

山川

山川町

鹿児島県揖宿郡山川町で、薩摩半島東南端の町で、山川湾奥の山川港は、かって捕鯨・サンゴ採集の基地であったが、今はカツオ漁業の根拠地、町内各所から温泉が湧出、成川・うなぎの温泉街と長崎鼻への観光客が多い、カツオ節・タバコ・ニンジン・スイカ・サツマイモを産し、山川漬は有名。

◎徳島県麻植郡山川町、農業と製紙業の町、西の高越山はツツジの名所。

◎福岡県山門郡山川町、矢部川流域低地と、東部の山地から成り、低地は水田地帯山腹の斜面は、ミカン・野

菜・ブドウの生産が多い。

山川村　福岡県久留米市で、山川村は久留米市に併合消滅、古来「久留米かすり」の産地として知られたが、現在はゴム工業の町で、ブリヂストン・月星化成・日本ゴムの三社が立地生産量は日本一、日輪寺古墳・下馬場古墳・浦山古墳と高良山神篭石などがある。

八瀬　京都府京都市左京区の郊外で、八瀬遊園地がある。

横川町　鹿児島県姶良郡横川町農林業の町で、霧島火山の南西麓にあたり、火山灰地の丘陵が多く、米・サツマイモ・タバコ・茶栽培のほか養蚕肉牛の飼育を行なう。

横川　群馬県碓氷郡松井田町の一区域で、信越本線の横川駅があり、「峠の釜飯」が名物。

やせ　◎東京都墨田区横川一から五丁目までの、中小企業集中区である、東京ゼロメートル地帯で、日本たばこ産業の工場がある。

横川　◎広島県広島市西区北西部のターミナル地区、山陽本線の横川駅があり、駅前は商店街。

横山

横山町

東京都中央区日本橋横山町の通称で、繊維・雑貨問屋の街で、江戸時代から奥州街道沿いに発達して来た街である。

◎東京都八王子市横山町、八王子市街東部の商店街で江戸時代は横山宿と言われ、甲州街道第六の宿場町として繁栄した。